湯梨浜町

歴史文化財ガイドブック





目次

巨大集落遺跡と山陰最大級の古墳を生んだ内海の恵み 先史・古代の遺跡 1~{
東郷池/長瀬高浜遺跡/長瀬高浜遺跡出土埴輪/長瀬高浜遺跡玉作関係資料/小銅鐸/ 1号墳出土鉄刀/宮内第1遺跡/橋津(馬ノ山)古墳群/北山古墳/宮内狐塚古墳/ 中興寺1号墳/大平山古墳群/石脇第3遺跡/久見遺跡
社寺勢力と武家勢力の土地をめぐる対立 中世荘園絵図の世界 6~1 東郷荘下地中分絵図/伯耆一宮 倭文神社/安産岩/伯耆一宮経塚/伯耆一宮経塚出土品/ 籠守神社/東郷神社/森山神社跡/松尾神社/湊神社
群雄達がせめぎ合う東伯耆 戦国の攻防
羽衣石城陣城群鳥瞰図/羽衣石城跡/十万寺城跡/番城跡/羽衣石城の間道/馬ノ山砦跡/ 高野宮城跡/松崎城(亀形ヶ鼻城)跡/小森さんの墓/くさぎ地蔵/小木弾正の墓/鼻達地蔵/ 馬場跡/河口城(泊城)跡/九塚城跡
藩政期から明治維新までの足跡をたどる 近世・近代の遺産19~23
橋津藩倉/尾﨑家住宅/尾崎氏庭園/安楽寺/和田氏陣屋跡/天神川直流化事業顕彰碑/ 泊舟番所・御役所跡/鳥取藩台場跡橋津台場跡/因幡二十士乗船之地記念碑/旧富士市橋家住宅/ 旧鳥取家庭裁判所(小鹿谷公民館)/報國盡忠碑
有形文化財
高辻の子持勾玉/小浜の銅鐸/北福の小銅鐸/石脇の仿製三角縁獣帯文鏡/宮内の石帯/野方廃寺跡出土瓦/高辻の陶経筒/木喰上人が遺した仏像/弘法大師坐像/恵比須像/大黒天像/大日如来坐像/大伝寺の中将姫像/龍徳寺の薬師如来坐像/埴見の聖観音立像/西向寺の十一面観音菩薩立像/西蓮寺の丈六の地蔵菩薩立像/泊地蔵堂の地蔵菩薩/長栄寺の天井絵/覚善寺の天井絵/西向寺の天井絵/灘郷神社の狛犬/筒地の一石彫成五輪塔/橋津藩倉の竜吐水/岡本家文書/南条元清寄進状/後陽成天皇口宣案/泊の漁業関係資料/漁撈具/シイラ漬漁関係絵図・古文書/天保絵図/装飾画「桐花瑞鳥図」/装飾画「平和の苑」/日本各時代意匠表紙図案/
無形民俗文化財34~37
田後神社頭屋祭「宮の飯」/湊神社の祭礼行事/茶町踊り/宇野三ツ星盆踊り/中将姫の練供養/ 東郷浪人踊/国主神社の麒麟獅子舞/泊の大名行列/泊貝がら節/園の「ええ子ええ子」
史跡・名勝38~4 2
羽衣天女伝説/羽衣岩/羽衣池/今滝/不動滝/鮎返りの滝/宇野地蔵ダキ/亀石/出雲山/ 宮戸弁天/馬ノ山展望台/橋津の離水海食洞/後島の甌穴群/はわい温泉/東郷温泉
天然記念物 _{43~45}
トウテイラン自生群落/オオサンショウウオ/山陰柴犬/二十世紀梨の樹「百年樹」/ 松崎神社の社叢/国主神社の社叢/宮内井戸の椿/更田家シイの木/更田家マキの木
町ゆかりの人物 _{46~49}
伊王野坦/尾﨑文五郎/栗原潔子/三枝礼二/谷田亀寿/団野蔵六/千熊章禄/長瀬村利七/ 中原和郎/橋田邦彦/藤原喜代蔵/益田伝吉/碧川かた/森岡柳蔵
歴史民俗資料館

羽合歷史民俗資料館/泊歷史民俗資料館

巨大集落遺跡と山陰最大級の古墳を生んだ内海の恵み

先又: 市代の遺跡

東郷池周辺は、砂丘の集落遺跡・長瀬高浜遺跡や、山陰最大級の橋津4号墳・北山古墳などがあり、県内でも有数の遺跡の宝庫である。

天然の良港である東郷池を拠点とした有力豪族が存在し、古墳や出土品の形態などから、大和政権と関りを持つ勢力であったと考えられている。

東郷池

湯梨浜町の中心にある東郷池は、山陰八景の一つに数えられる風光明媚な湖で、別名「鶴の池」とも呼ばれる。周囲約12km、面積約4km²、水深は深い所で6~8m、平均水深は約2mの汽水湖で、舎人川、東郷川、羽衣石川、埴見川が流れ込み、橋津川によって日本海に流出している。ヤマトシジミ、フナ、コイ、ウナギ、アマサギなどが採れ、冬には数多くの水鳥が飛来する。

縄文時代には日本海に臨む湾であったが、 弥生時代には天神川上流から流れて来る砂が 堆積して沿岸州を形成し、沿岸州が西から東 へ成長して北条砂丘を形成し、砂丘により湾 の入口がふさがれて大きな内海(潟湖)と なった。

天然の良港である内海では水運によるヒト・モノの移動が活発になるため、東郷池周辺には弥生時代から長瀬高浜遺跡などの大集

落が形成された。また内海を取り囲む馬ノ山や大平山などの山陵には、橋津古墳群をはじめ 900基以上の古墳があると言われている。内海の東岸に ある御冠山山麓には、伯耆国で最も社格の高い一宮倭文

神社が鎮座する。



内海の西側は天神川が運ぶ土砂が堆積して羽合平野が 形成されていき、古代の条里制に基づく碁盤目状の区画 の条里遺構が現在も残されている。

日本海との唯一の出入口である橋津川河口の橋津港は、海上輸送の拠点として近世まで大きな役割を担い、 鳥取藩の灘蔵である橋津藩倉がその名残を留めている。

長瀬高浜遺跡 (HDIV長瀬) 3

天神浄化センターと北条バイパス建設工事に伴い昭和49 年に発見された、鳥取県を代表する遺跡。北条砂丘の丘陵 部を4m以上掘った下にある厚さ1~2mのクロスナ層か ら、弥生~古墳時代の集落跡(200棟以上の竪穴建物・掘 立柱建物跡、井戸跡など)、弥生時代の墳墓、古墳、中世



の畠跡・墓などが発見された。直径 1 m以上の巨大な 4 本柱を持つ建物跡もあり、高さ20m程 度の神殿のような高層建築が存在した可能性がある。遺跡内の出土品は、縄文土器・弥生土器・ 上師器・須恵器・陶磁器・石器・玉類・青銅器・鉄器・木製品・土製品など多岐にわたる。令 和の発掘調査では、全国的にも珍しい竪穴建物内の囲炉裏跡が発見された。

なが せ たかはま い せきしゅつ ど は に わ

長瀬高浜遺跡出土埴輪

[重要文化財] 羽合歷史民俗資料館 4

通常古墳から出土する埴輪が、遺跡内北西隅の古墳以外の場所 から大量に密集した全国的に類を見ない状態で発見された。古墳 時代中期の埴輪で、大部分は朝顔形だが、円筒埴輪と甲冑・盾・家・ 蓋・鞆形の形象埴輪もあり、甲冑形は古墳時代の甲と冑を原寸大 で精巧に表現している。古墳外に置かれた経緯は不明だが、埴輪 の貯蔵場所だった、埴輪群の下層の井戸跡に関わる祭祀に用いた、 集落の移転に伴う祭祀に用いたなどの説がある。



長瀬高浜遺跡玉作関係資料 羽合歴史民俗資料館 4

弥牛前期の竪穴建物跡から、管玉などの玉製品の作りかけの素材や、穿孔に失敗して割れた 破片などが大量に発見され、日本最古級の玉作り工房跡として注目された。

しょうど う た く

八旬季 羽合歴史民俗資料館 4

小銅鐸とは銅鐸の模倣品だが、集落外に埋納された例が多い銅鐸と異なり、 集落内の住居跡などから発見される。本品は古墳時代前期の竪穴建物跡の上層 で発見されたが、弥生中期頃の作で、集落内で長期間祭祀具として使用された とみられる。小型だがつくりは丁寧で、鈕の外縁に連続渦巻文、内縁にS字状 渦巻文が施されている。鈕の中央部の磨滅から、紐などで吊るしてベルのよう に使用されたとみられる。



羽合歴史民俗資料館 4

直径33m、高さ2mの古墳時代中期の円墳・長瀬高浜1号墳の埋葬施設の箱式石棺から、首 長とみられる熟年女性の骨と共に出土。全長101.2cmで木製の鞘に布が巻かれ、さらにその 上に隙間なく巻かれた幅9mmの組紐の繊維が残存する。1号墳は天神浄化センターの南東端 に移転復元されている。



宮内第1遺跡 函



東郷池を望む丘陵の尾根上に、四隅突出型墳丘 墓1基を含む4基の弥牛時代の墳斤墓と、多数の 十塘墓が発見された。そのうち四隅突出型墳丘墓 である宮内1号墓からは、副葬品として鉄剣(全 長71.4cm)・鉄刀(全長94.5cm)・管玉が出土 した。弥生時代の鉄剣・鉄刀としては国内最長で、 中国または朝鮮半島で作られたものと考えられて おり、丁寧に布で包まれた状態で副葬されたとみ られる。当時鉄製品や玉類は非常に貴重であり、 弥生時代の墳墓からの出土例は極めて珍しい。鉄 剣・鉄刀は鳥取県埋蔵文化センター寄託。

橋津(馬ノ山)古墳群

日本海と東郷池を見下ろす馬ノ山の 丘陵に28基の古墳が点在しており、 これらを総称して橋津(馬ノ山) 古墳 群という。5基の前方後円墳、21基 の円墳、2基の方墳が確認され、古墳 時代前期(4世紀)から後期(6~7 世紀) まで長期間大規模な古墳が造ら れ続けているため、日本海及び東郷池 の水上交通を支配した強大な勢力が数 百年にわたって存在していたと考えら れる。1~12号墳、14号墳、21号墳



の14基が国の史跡に指定されており、山陰の古墳文化を考える上で非常に重要な古墳群である。 中でも橋津(馬ノ山) 4号墳は推定全長100mを超える大型の前方後円墳で、埋葬施設が12 基も確認されている。後円部の竪穴式石室からは銅鏡5枚のほか、勾玉、管玉、石釧、車輪石、 直刀、剣、鉇、斧、鋸が発見されており、これらの豊富な副葬品から、古墳時代前期(4世紀)

の古墳であることが判明している。その ほかの埋葬施設からも銅鏡、埴製円筒棺 などが出土しており、一部は羽合歴史民 俗資料館に展示中。

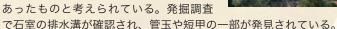
頭に2本の鳥の羽のようなものを付 けた人物像を線刻した円筒埴輪片(同志 社大学所蔵) も発見されており、古墳時 代における人物埴輪成立以前の人物表 現例として非常に貴重である。



北山古墳 野花・長和田 23

東郷池南岸の標高50mの丘陵上にあ る、全長110m、後円部直径70mの前方 後円墳で、墳丘には葺石が見られ、山陰 地方最大級の古墳である。

後円部は大正期に盗掘により破壊され ていたが、長さ5~6mの竪穴式石室が あったものと考えられている。発掘調査



石室の南2mの所では箱式石棺が見つかっており、中国製の銅鏡、勾玉、管玉、なつめ玉、 鉄斧、鉄刀などが出土している。そのほか、盗掘された周辺から籠目土器(籠に粘土を押しつ けて作った土器)なども見つかっている。墳丘からは円筒埴輪や朝顔形埴輪のほか、楯・短甲・ 錣・鶏などの形象埴輪も見つかっており、これらの出土品などから5世紀前半頃の古墳と考え。 られる。山陰を代表する古墳として貴重である。



宮内狐塚古墳 翻 16

東郷池北東岸の出雲山と呼ばれる丘陵 上にある、全長90m、後円部直径55mの 大型前方後円墳。前方部を湖の方に向け ている。発掘調査は行われていないが、古 墳時代前期(4世紀頃)のものと推測され ている。周辺からは円筒埴輪片や葺石が 見つかっている。



ちゅうこう じ ごうふん

中興寺1号墳中興 34

古墳時代後期の7世紀頃に造られたと みられるが、盛り土が流出してしまって、 横穴式石室の石組みだけが残されている。 横穴式石室は平石を用いて造られており、 規模は奥行4m、入口幅1.7mで、町内で も最大級の石室といわれている。



大平山古墳群

[県指定史跡] 門田・倉吉市福庭 20

倉吉市との境にある標高191mの大平 山には、前方後円墳7基を含む210基以 上の古墳が点在している。尾根の東側の 門田・片平古墳群は40基弱の古墳が点在 し、うち横穴式石室が23基、箱式石棺が 3基確認されている。

7世紀前半の須恵器が出土した5号墳 は、盛土が流失し横穴式石室が露出して

おり、石室の築造方法や墳丘の裾に列石を巡らせる点が特殊である。尾根の西側の倉吉市福庭 にある福庭古墳は、切石積みの横穴式石室を持つ古墳時代終末期の円墳で、県の史跡に指定さ れている。



石脇第3遺跡 西

山陰道青谷羽合道路建設に伴い発見さ れた石脇第3遺跡では、奈良~平安時代 の掘立柱建物跡と瓦が多数出土した。当 時瓦葺の建物は行政施設や寺院に限られ たため、都と山陰地方をつなぐ古代山陰 道に一定間隔で設置された駅家のうち、 **笏賀の駅家の跡であると推定されている。**



久見遺跡 @ 36

旧東郷中学校敷地や南側の梨園から、 古い瓦や礎石(柱を支える基礎石)など が出土しており、梨園と旧中学校敷地を 含む1町(約100m)四方の範囲が久見 遺跡と考えられている。遺跡は奈良時代 (8世紀)の寺院跡とも考えられるが、

同時期に存在した野方廃寺と1.6kmしか 離れていないことから、郡衙(郡の役所) 跡とも考えられている。

出土した軒丸瓦や軒平瓦の中には白鳳 時代(7世紀後半)に遡るものもある。

奈良時代のものの中には、倉吉市の伯耆国分寺跡と同じ型式の互もみられる。



社寺勢力と武家勢力の土地をめぐる対立

中世江園絵図の世界

平安後期から東郷池周辺は京都の松尾大社の荘園であり、東郷荘と呼ばれていた。鎌倉中期の正嘉2年(1258)、土地の支配権をめぐる領家と地頭の紛争を解決するため、幕府の仲裁で土地を折半する「下地中分」が行われた。

この絵図は下地中分により確定された領家と地頭の支配域の境界を明示するために作成され、ほとんど現存していない下地中分絵図の中で、最も有名なものである。

●境界の朱線と花押

領家(松尾大社)分と地頭(幕府の御家人・東郷氏か)分との支配域の境界を、朱線で区切っている。朱線の両端には幕府の執権北条長時と連署北条政村の花押が据えられており、幕府の法廷で正式に下地中分が行われたことを証している。基本的に東郷池の西側を領家分、東側を地頭分として中分するが、田畑が多い北西の伯井田・小垣と、牧がある北東の馬野も、それぞれ朱線によって中分している。



長時(右)と政村(左) の花押

2 神社と鳥居

神社は朱塗りの檜皮葺で千木が描かれている。領家松尾大社から勧請された「松尾社」のみ鳥居があり、その他の神社は鳥居がなく名称も「〇〇宮」となっている。寺は板葺で縁があり、民家は掘立柱の藁葺、縁と礎石がある民家は領主の屋敷など、細かく描き分けられている。



③ 第3勢力 伯耆一宮

東郷池東岸には「一宮」が描かれている。西岸に「一宮領長江」、海岸に「一宮領宇野」、北東のはずれに「一宮領那志多」が描かれ、東郷池周辺には領家と地頭だけでなく、一宮の支配域もあったことがわかる。



4 羽合平野と伯井田

羽合平野には「伯井田」と書かれており、これが転訛して「はわい」の地名の由来となった。古代の条里制の区画に沿って南北に走る紫縄手と東西に走る廣熊路を境界として、羽合平野の田畑が均等に中分されている。



5 天神川

江戸時代に改修される前の天神川は、東へ蛇行してから再び北へ向かい、橋津川に合流していたことがわかる。当時長瀬村は天神川の西側にあり、北条郷に属していた。

東郷荘下地中分絵図(模本)東京大学史料編纂所



- ⑥ 東郷池の2隻の舟の人物は、片や烏帽子姿、片や編笠の漁民風と、細かく描き分けられている。
- → 馬野周辺の牧には、12頭の馬が躍動感たっぷりに描かれている。
- ❸日本海には西へ向かう帆船が3隻描かれ、東郷荘にとって海運が重要であったことがわかる。

伯耆一宮

平安中期の延喜式神名帳に記載され た式内社で、伯耆国で最も社格の高い 神社を表す「伯耆一宮」を称する。創 建は不明だが、古代にはこの一帯は倭 文織(麻などの繊維を赤や青に染めて 縞模様などを織り出したもの) の産地 であり、倭文部の人々が倭文の神であ る建葉槌命を祀ったものと考えられて いる。『日本文徳天皇実録』等の史書



には「倭文神」が斉衡3年(856)に従五位上に、天慶3年(940)に従三位から正三位に昇 進した記録があり、年代不明だが「正一位伯州一宮大神宮」の勅額とされる額も残されている。

また社伝によれば、出雲から大国主命の娘・下照姫命が亀に乗って宇野の海岸に上陸し、御 冠山を背にしたこの地に住居を定めたのが始まりとされる。周辺には下照姫命に関する伝承が 多く残り、下照姫命をはじめ事代主命、建御名方命、少彦名命、天稚彦命、味耜高彦根命など 出雲系の神々が祀られている。

中世には広大な社領を有し、周辺には神仏習合による天台系の神宮寺がいくつもあったが、



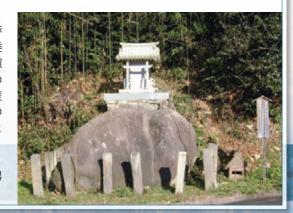
戦国時代の戦乱の影響で多くの社領を失って荒廃し、神 宮寺も四散した。しかし天文23年(1554)に尼子晴久 が社殿を造営して社領70石を寄進、元亀元年(1570) に羽衣石城主南条宗勝が社領を復旧するなど、有力武将 の寄進を受けて存続し、近世には鳥取藩主からも厚く崇 敬された。現在の流造の社殿は、文化15年(1818)に 建立された。

祭神の下照姫命は、安産の神として広く信仰されてい る。毎年5月1日の例祭では神輿渡御や稚児行列が行わ れ、「一宮さん」として親しまれる大祭である。

安產岩 翻 18

倭文神社に至る参道の傍に安産岩と呼 ばれる岩がある。難産に苦しむ婦人が、倭 文神社の祭神で安産の神といわれる下照 姫命を信仰して願をかけたところ、満願の 日にこの岩で無事出産したことから、安産 岩と呼ばれるようになったとされる。この 岩を削り妊婦が服用すると、安産になると 伝えられている。

安産岩の北側には、夫婦岩と呼ばれる2 つの岩がある。右の岩が女性、左の岩が男 性を表わしているという。



伯耆一宮経

[史跡] 宮内 18

伯耆一宮の南東の丘陵上にある経塚 は、祭神下照姫命の墓と伝わり、元日 の朝に塚の上で金の鶏が鳴くという金 鶏伝説の舞台であった。

大正4年(1915)に近在の数人が無 断で塚を掘ったところ、地表から1.5m 下に、長さ1.2m、幅0.9m、高さ0.5m の石槨(石で囲まれた空間)が出現し た。中からは銅製の経筒などが発見さ れ、経筒の銘文から平安後期の経塚で あることが明らかになった。



平安後期、世間には釈迦の教えが失われ世の中が乱れるという末法思想が蔓延していた。こ のため釈迦の正しい教えを後世に伝えようと、経典を丈夫な容器(経筒)に入れて土中に埋め、 魔除けの鏡や刀子などを添え、その上に土や石などを積み上げた「経塚」が全国各地で作られた。 経筒は一種のタイムカプセルで、末法が終わる56億7千万年後、弥勒が衆生を救うために来迎 する際に必要だと考えられていた。

経塚の出土品(銅経筒1口、金銅観 音菩薩立像 1 体、銅浩千手観音菩薩立 像1体、銅板線刻弥勒立像1面、銅鏡 2面、瑠璃玉一括、銅銭2枚、檜扇残 片、短刀・刀子残闕、漆器残闕)は、 大正9年(1920)に国宝に指定され、 戦後の昭和28年に再指定された。

銅経筒は笠、筒身、台座の3部から なる。笠は方形で、上面に釈迦・大日・ 阿弥陀・弥勒の種字を彫り、四隅とそ の中間の8カ所に瓔珞を取り付けるた めの輪がある。筒身は円筒状で、全面 に15行236字の銘文が彫られている。

銘文によれば、平安後期の康和5年



(1103) に、一宮神宮寺の僧とみられる「京尊」なる人物が、釈迦の入滅から2052年に当た る末法の世に、伯耆国河村東郷に鎮座する一宮大明神の御前で法華経を埋め、弥勒が出現した 時に掘り出して、すべての人が悟りへと至ることを願ったものである。当時すでにこの一帯が「東 郷」の名で呼ばれていたことや、倭文神社が「一宮」と呼ばれていたことがわかる貴重な資料 である。

[県指定保護文化財]

籠守神社 5里22

現在の社殿は元禄13年(1700)の建立で、県中部で最も古い神社本殿建築である。県内で同様 の社殿は一間社が多い中、三間社流造と、比較的規模も大きなものである。建築年代の決め手となっ たのは蟇股の裏の墨書で、元禄13年に備前国の横山益三という大工が建てた旨が記されている。祭 神は航海守護の住吉三神であり、かつて東郷池がこの辺りまで及んでいたことの名残りとも考えられる。

「東郷荘下地中分絵図」には現在の埴見地内に「土 海宮」の記載があり、土海は「はなみ」とも読め、 籠守神社宮司家に「土海宮神主」と書かれた文書が 伝わっていることから、同社がかつて土海宮と称し ていたことがうかがえる。

埴見地内には現在も「土海」姓が多くあり、明治 22年(1889)の町村制導入時には、野花、長和田、 羽衣石、門田、佐美、長江の6村と合併して「花見村」 を称するなど、「はなみ」の名は地域の歴史に深く刻 まれている。





東郷神社 小鹿谷 28

大正4年(1915)に旧東郷村にあった13 の神社を合祀し、東郷神社として現在の場所 に社殿を新設した。その後、大正13年に郷社 になっている。

合祀前の各神社の祭神を引き継いでいるた め、祭神は誉田別命の他15柱にもなる。合祀 された13の神社は、引地神社(引地)、森山 神社 (小鹿谷)、松上神社 (小鹿谷)、秀尾神 社(小鹿谷)、和田神社(田畑)山辺神社(国



信)、別所神社(別所)、高辻神社(高辻)、新宮神社(川上)、久見神社(久見)、谷口神社(中 興寺)、麻畑神社(麻畑)、松尾神社(方面)である。

このうち、秀尾神社はかつて「桂尾山八幡宮」と呼ばれ、「東郷荘下地中分絵図」に記載され ていることから古社である事は明らかで、歴代武将の崇敬厚く、羽衣石城主南条氏の祈願所と なり社領の寄進を受けている。また、近世には藩から社領5石9斗7升を寄進され、藩主池田 家の祈願所にもなっていた。明治維新の時、小字名をとって秀尾神社と改められた。

森山神社跡 小鹿谷 29

小鹿谷集落の背後にあった森山神社は、大正4年 (1915) に東郷神社に合祀され、現在は石段と鳥 居だけが残されている。「東郷荘下地中分絵図」には、

「守山宮」と記載されている古社である。江戸後期 頃の社名は森山牛頭天王となっており、明治期に素 盞鳴尊を祭神として森山神社と改められた。小鹿谷 集落ではかつてこの神社に関連して、キュウリを食



べない風習があった。祭神の牛頭天皇を祀る祇園社の社紋が、キュウリの輪切りした断面によ く似ているからだといわれている。

松尾神社 野花 24

東郷池南岸の野花集落背後の高台にある。鎌倉時代の 東郷池周辺は京都の松尾大社の荘園であったため、荘園 の守護神として、松尾大社の祭神を勧請して創建された ものと推定されている。「東郷荘下地中分絵図」では唯 一「○○宮」ではなく「松尾社」と記載されており、鳥 居も描かれている。言い伝えによると、社殿は元々は羽 合地域の光吉にあったが、洪水の時、北風に吹き流され



野花の浜藪に漂着したので、その地に祀り、後に現在の地に遷ったといわれている。今でも光 吉に松尾屋敷と呼ばれる場所がある。現在の本殿は宝永3年(1706)の建立。

室町時代には羽衣石城主南条氏の祈願所になっており、永禄5年(1562)に南条元清から社 領75石の寄進を受けている。祭神は大山咋命、木花開耶姫命、別雷命と、合併神社祭神の八柱 である。古来より酒造りの神として広く崇敬され、毎年12月13日には酒造祭が行なわれていた。

湊神社 [6] 6

速秋津彦命、速秋津姫命などの5神を祀り、古く より海上安全の神社として信仰されている。創建年 代は不明だが、貞観9年(867)に従五位下に叙さ れている格式の高い神社である。橋津港が古代から 海上交通の拠点として重要な地であったことをうか がわせる。

天文年間(1532~1555)に尼子晴久が150石、 天正年間(1573~1592)に吉川元春が50石の社



領を寄進している。近世には藩主池田光仲も50石の所領を認め、さらに橋津藩倉から年貢米の 蔵出しの際に千俵当たり] 俵を寄進している。宝永元年(1704)に御回米安全祈願を請願した 折、祭日には永代舟御幸を執行するよう藩から申し渡されたと伝わり、毎年10月の例祭では舟 御幸は中止されているが、大名行列や神輿、花車が繰り出され、往時をしのぶことができる。

吉川元春の布陣場所

茶臼山

吉川元春の布陣場所

馬ノ山布陣前の

橋津川

御冠山 従来秀吉の布陣地 と考えられてきた

東郷池

松崎城 南条氏の支城

上山城

南条氏の支城

番城

馬ノ山砦の吉川軍から羽衣石城を守るために 羽柴秀吉が築いた陣城とみられる

高野宮城 南条氏の支城

群雄達がせめぎ合う東伯耆

幣国の政防

戦国時代、因幡との国境に近い東伯耆は、尼子・毛利・織田などの大勢力のせめぎ合いの 狭間にあった。羽衣石城主南条氏をはじめとする東伯耆の国人達は、時に協力し、時に離反 しながら、めまぐるしく変化する情勢の中を生き抜いていた。

天神川



十万寺城

羽衣石城への補給のために羽柴秀吉が築いた陣城とみられ 天正9年の秀吉の布陣地ではないかと近年注目されている

羽衣石城

東伯耆3郡を支配した有力国人南条氏の本拠地 日本海・東郷池と因幡・美作国境の間に位置する水陸交通の要所



羽衣石城陣城群島瞰図 (推定復元)

天正9年(1/581)10月、毛利方の吉川経家が籠城する鳥取城を陥落させた羽柴秀吉は、吉川元 春と交戦中の羽衣石城主南条元続からの救援要請に応えて東伯耆へ進軍し、羽衣石城付近に布 陣して、馬ノ山砦の吉川軍と対峙した。

吉川軍6千に対し秀吉軍は数万の大軍であったが、経家の弔い合戦と決死の覚悟で臨む吉川 軍との全面衝突を避け、羽衣石城へ兵糧・弾薬を補給して引き上げたという。

イラスト 8 香川元太郎

羽衣石城跡 羽衣石 41

東伯耆の有力国人南条氏の本拠地の山城で、出雲守護塩治高貞の次男貞宗が、貞治5年(1366)に築いたと伝わる。南条氏は室町時代に伯耆守護山名氏の守護代を務め、戦国期に出雲の尼子氏が伯耆に侵攻すると、安芸の毛利氏に与して対抗した。尼子滅亡後は河村郡・久米郡・八橋郡を領有し、毛利氏の山陰支配の一翼を担った。



縄張図

天正年間(1573~1592) に織田信長の中国攻めが始まると、調略を受けて天正7年に城主南条元続が毛利方を離反し、西伯耆から因幡へのルートを遮断して羽柴秀吉の鳥取城攻めを支援した。そのため羽衣石城は毛利方の吉川軍の激しい攻撃を受け、多くの城兵が離散した。本能寺の変の後、秀吉と毛利氏が和睦すると、南条氏は再び羽衣石城を拠点に東伯耆を領有したが、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで西軍に与して敗れ、廃城となった。

標高372mの急峻な山の頂上に、本丸・曲輪・虎口などの遺構が残る。本丸跡は東西66m、南北20m、北西の尾根上を中心に大小多数の曲輪跡が存在する。瓦の出土はなく、城は板葺または草葺であったとみられる。16世紀の陶磁器・土器が多数出土しており、合戦の際の籠城に実用されていたことがうかがえる。昭和6年に南条氏の子孫が本丸跡に私財を投じて、トタン製の模擬天守を建立。その後平成2年に現在の天守へ改築された。

じゅうまん じ じょうあと

十万寺城跡 图 43

羽衣石城の南西800m、標高423mの山上に残る山城遺構で、270m×200mの尾根筋上に、巨大な堀切と切岸、主郭を取り囲む土塁、周囲を取り囲む帯曲輪状の通路などの防御ラインを備えた、織豊系城郭の特徴を持つ。北東側の東西50m、南北90mの曲輪が主郭とみられ、羽衣石城と馬ノ山砦を一望できる。曲輪内部の加工が甘く、発掘調査でも生活跡が確認されていないことから、短期間だけ使用した臨時の城とみられる。



縄張図

天正年間(1573~1592)に毛利方を

離反し織田方へ付いた南条元続は、毛利方の吉川軍に攻められ、鳥取城攻略中の羽柴秀吉に救援を求めた。その要請に応えた秀吉が、本陣兼羽衣石城への救援物資保管施設として築いたものと考えられる。攻城用ではなく救援用に築かれた織豊系陣城は、全国的にも例がなく貴重である。

山口県の寺院に伝わる「木造三重小塔」の基壇裏の銘文によると、15世紀初頭にはこの付近 に十万寺という寺院が存在していた。

ほんじろあと

番城跡 羽吞石 42

羽衣石城の北東450m、標高408 m、110m×60mの尾根筋上に残る山城遺構で、十万寺城と同様に織豊系の特徴を持つ臨時の陣城とみられる。曲輪の北側を土塁で囲み、曲輪の下の北側斜面に二重に横堀を設けるなど、北側の防御機能が強化され



黒張図

ている。馬ノ山砦の吉川軍の攻撃から羽衣石城を守るための出城として、秀吉が築いたものと考えられる。

羽衣石城の間道

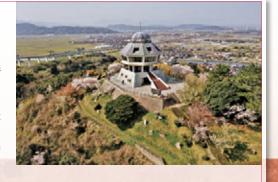
羽衣石・三朝町山田

羽衣石城の間道には、宮の谷越しと呼ばれ、 十万寺から三朝町山田に通じるものと、坂の 谷越しと呼ばれ、山田から鼻達地蔵の所に通 じるものがある。この一帯を南条氏が支配し ていた15~16世紀頃には、竹田・三朝両郷 の年貢米は山田村に集められ、これらの間道 を通って十万寺や羽衣石城に運ばれており、 大変重要な道であった。



馬ノ山砦跡 上橋津

北に日本海、西に橋津川を望む標高107mの馬ノ山周辺にあった砦跡。羽柴秀吉の因幡侵攻に協力する羽衣石城の南条元続を攻撃するために、吉川元春が整備したと考えられている。かつてはハワイ風土記館の東側に残存する土塁が吉川軍の陣跡と考えられていたが、その後の調査で他の場所にも土塁や堀切の遺構が発見され、砦が複数箇所あったのではないかと考えられている。



天正9年(1581)10月、馬ノ山に進軍した元春は鳥取城陥落と秀吉進軍の報を受けて、橋津川の橋を落とし、軍舟を陸に引き上げて櫓を折り捨て、馬ノ山に背水の陣を布いて秀吉と対峙した。吉川軍は6千、秀吉軍は6万とも8万とも伝わり戦力差は歴然だったが、秀吉は元春の覚悟のほどを見て合戦を避け姫路へ帰陣したという、『陰徳太平記』などに見える馬ノ山の対峙の逸話で知られる。

14

高野宮城跡 6 21

羽衣石川西岸の権現山の北側尾根の先端部、標 高191mの山上にある羽衣石城の出城跡。20m 四方の主郭の南北尾根上に曲輪を設けている。主 郭の北側に巨石があり、「土海宮(現籠守神社)」 の故地とも考えられる。

『伯耆民談記』などによると、北栄町北条島の 堤城主山田重直は南条家臣でありながら敵方の手 利と内通していた。ある夜、羽衣石城下の重直の

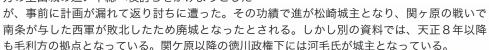


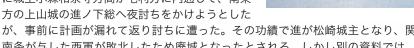
屋敷から忍び出た不審な者を南条家臣が取り押さえると、懐の密書から高野宮城への夜討ち計 画が明らかになった。高野宮城主山田佐助は計画を知らぬふりをして、城の防備を固めて重直 軍を待ち伏せた。重直は兵300人を引き連れて高野宮城に攻めかかったが敗れ、自宅を襲撃さ れて妻子を捕らえられ、本拠地である堤城も攻め落とされてしまった。

松崎城 (亀形ヶ鼻城) 松崎 31

東郷池南東岸に突き出した標高20mの小山に あった羽衣石城の出城で、南条氏の与力小森氏の 築城とされる。旧桜小学校建設のため遺構は大きく 改変されており、工事中に出土した石垣の石が残さ れている。現在はさくら工芸品工房になっている。

『羽衣石南条記』などによると、天正8年(1580) に城主小森和泉守方高が毛利方に内通して、南条





小森さんの墓脈

別所集落のはずれに小さな五輪塔が祀られてい る。小森さんとは松崎城主小森和泉守のことで、天 正8年(1580) に吉川軍が羽衣石城を攻撃した時、 吉川方の八橋城主杉原盛重は、小森に密かに使者 を送り味方に引き入れた。そして、時を定めて上山 の進ノ下総の陣所に夜討をかけることを計画した が、事前に進ノ下総に知られて待ち伏せされた。そ うとも知らず兵200人で攻め込んだ小森は反撃に



遭い敗れて別所の名主の家に逃げ込んだが、見つかって討ち取られてしまった。首は羽衣石城に送 られたが、小森の知行所である別所の人たちは、遺体を乞い受け手厚く葬ったという。

くさぎ地蔵中興寺

天保年間(1831~45)に書かれた『東郷 池面鏡』には、次のような話が伝えられてい る。戦国時代も終わろうとする頃、松崎城主 川(河) 毛伯耆守家成を北条の茶臼山城主俣 野五郎景久が攻めた。まさに落城せんとした 時、松崎城が山ごと池中に動き出し、俣野軍 は溺れて敗走し、現在のまつざきこども闌付 近で5名が力尽き倒れてしまった。同軍の者 達は5名をその場に葬り、目印にくさぎを植



え、後日、数体の地蔵を安置して供養した。その後、くさぎは大木となり、土地の人々はこの 地蔵をくさぎ地蔵と呼ぶようになったという。くさぎの大木は昭和10年頃まで繁っていたが、 その後枯れてしまった。

小木弾正の墓 📾

宮内集落の入り口に、佐渡の小木城主小木 弾正輝信を供養する五輪塔が建っている。天 正9年(1581) 羽柴秀吉は鳥取城攻略後、 羽衣石城救援のため伯耆に入り馬ノ山の吉川 軍と対峙した。秀吉に従軍してきた小木弾正 は、家来をつれて夜間見回り中に、伯耆一宮 付近で敵の一団を発見し切り合いとなった。 弾下は武勇に優れた名将であったが、不覚に も袴の裾が切り株に引っかかり、倒れたとこ るを切りつけられ、仲間6人と共に無念の最 期をとげた。



鼻達地蔵 羽茲石

羽衣石城主南条元忠 (元続の子) は、領地 の境界争いで検者である中山町退休寺の梅天 和尚が南条方を不利にしたため、和尚の鼻に カズラを通して引きまわした後、死刑にして しまった。その報いのためか、元忠に鼻がふ さがった2人の児が生まれ、やがて死んでし まった。僧のお告げにより元忠はこの地に寺 を建立し、延命地蔵を安置して供養したとこ ろ、健康な児が誕生したと伝えられている。



馬場跡 羽和 40

馬場とは乗馬や馬の調教を行うところで、字名が「馬場」となっている一帯は、15~16世紀頃に羽衣石城主南条氏や家臣達が馬の稽古に使用したものと推測される。



かりくちじょう とまりじょう あと [町指定史跡] **河口城 (泊城) 弥 泊・園 50**

因幡国境に位置する陸海交通の要衝に築かれた山城跡。泊漁港の南にそびえる標高68mの山頂部に、東西40m、南北60mに渡り曲輪、空堀、土塁、礎石、石垣などの遺構が残る。北側は海が迫る絶壁、南は山地へと続き、東西に走る山陰道に立ち塞がる天然の要害である。建武



4年(1337)に伯耆国守護職に任ぜられた山名時氏は、倉吉市の田内城(後に打吹城)を拠点に守護職を世襲し、因幡との国境近くに前線基地として河口城を築き、城主には代々一族の者を充てた。

『伯耆民談記』などによると、戦国初期に出雲の尼子氏が伯耆に侵攻、城主山名久氏は戦に敗れて因幡へ落ち延び、河口城は尼子氏の所領となる。天文年間、安芸の毛利氏を攻めるため尼子方の諸将が留守にした際に、かつて尼子に敗れた東伯耆の諸将が、旧領奪還のため河口城などを攻撃するもすぐに反撃に遭った。永禄年間に毛利氏によって尼子氏の勢力が駆逐されると、久氏は城主に復帰して、河口城は毛利水軍の拠点となった。天正年間に羽柴秀吉の因幡攻めが始まると、河口城は秀吉軍に包囲された鳥取城を救援するための前線基地となった。そのため織田方に与した羽衣石城主南条元続から幾度も攻撃を受けたが、巧みな戦術により退け続けた。しかし天正9年(1581)に秀吉の水軍に海から攻められ、泊の港に停泊していた軍船65艘を破壊され、補給が途絶えた鳥取城は落城した。天正10年に秀吉と毛利氏が和睦すると、河口城は南条氏の所領となったが、関ヶ原の戦いで西軍に与した南条氏が敗れると城は焼失した。

九塚城跡 石脇 52

石脇集落の南方にある高さ13m、周囲500m程の台地で、傍を筒地に通じる県道が通っている。戦国時代に河口城の因幡に対する前衛陣地として築かれたとみられるが、詳細は不明。



出雲の尼子氏滅亡から5年後の元亀2年(1571)、尼子再興を悲願とする遺臣山中鹿之助擁する尼子勝久がこの城を攻めた際、城を守る毛利方吉川元春軍と激戦になった。この時勝久は、部下の原又太郎の抜群の奮戦振りに「九塚表の合戦において粉骨の働き、比類無きに候」との感状を与えている。

天正年間(1573~1592)にかけても、毛利方の因幡進出の拠点として使われていたようである。関ヶ原合戦後は河口城と共に廃城となった。

城跡は江戸初期から大正4年(1915)まで、石脇村の氏神社で古木の生い茂る森であったが、 社地が廃止されてからは畑地として利用され鳥居だけが残されている。

藩政期から明治維新までの足跡をたどる

近世・近代の遺産

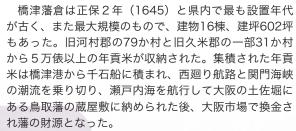
長きにわたる戦乱の時代が幕を閉じ、近世の湯梨浜町域は鳥取藩の統治のもとで、日本海と東郷池の水運により発展した。橋津川河口は河村・久米両郡の年貢米の集積地として、泊の港は海防や海運行政の拠点として、藩政における重要な地であった。松崎は家老・和田氏が治める城下町として発展した。

橋津藩倉

L県指定保護文化財

橋津 7

東郷池と日本海をつなぐ橋津川河口に設置された、鳥取藩の年貢米を集積・貯蔵するための米蔵である。藩内の各村から納められた年貢米のうち、換金用の米は灘蔵と呼ばれる海上輸送に便利な沿岸部の蔵に集積された。鳥取藩内には岩本・浜村・青谷・橋津・由良・逢東・赤碕・御来屋・淀江に灘蔵が設置されたが、現存するのは橋津のみである。また全国には1万か所以上設置されたと推測されるが、現存するのは橋津を含めてわずか数か所のみである。



明治期に入り廃藩置県と共に藩倉としての役目を終えたが、その後、一部の建物が改修され、橋津尋常高等小学校の校舎として利用された。また、明治10年(1877)には地租改正により圧迫された農村経済を改善するため、豪農の有志により共同倉庫(のちの奨恵社)が設立され、橋津藩倉の建物・敷地を拠点に金融・倉庫業が営まれ、その利益が困窮農民を援助する慈善事業に活用された。その後、山陰本線の開通による海上輸送の衰退と共に建物は徐々に解体されていったが、一部は農業倉庫などに利用された。現在は古御蔵・片山蔵・三十間北蔵の3棟が残されており、片山蔵では藩倉の歴史について展示されている。(見学は要問合せ)



古御蔵



片山蔵



三十間北蔵

尾崎家住宅 111

古風な構造と庭に開かれた座敷を持 つ江戸中期の豪農屋敷。日本海に面し て三方を丘陵に囲まれた宇野集落の最 奥部 (最南部) に位置し、東に隣接す る安楽寺と共に、歴史的景観を今に伝 えている。

尾﨑家は家伝によれば、周防(現山 口県)の守護大名大内氏の子孫で中世 に宇野に移り住み、近世以降は宗門改 めなどを行う宗旨庄屋や大庄屋を務め た。5代当主清右衛門が、それまでの 屋敷が手狭になったため現在の敷地に 移り、主屋、仏間、数棟の蔵、門長屋 などを新築した。

主屋と庭園、門長屋、蔵などの付属 建物を含めた屋敷構えが一体となって 保存されており、江戸中期の当地方に おける上層農家の住宅形式を明らかに







する上で、歴史的価値が非常に高い。令和3年の主屋解体修理工事で「元文四年(1739)」の 墨書が発見され、建築年代が明らかになった。

お さき し ていえん 尾崎氏庭園

[名勝] 宇野 11

主屋の南東側にある庭園「松 甫園」は、池庭地割の方式や 亀島などの形式から江戸中期 末葉に作られたと推定されて いる。小池泉鑑賞式庭園と呼 ばれるもので、三尊石組と書 院前の自然石の手水鉢は、近 くの海岸から産出された風雅 な安山岩が用いられており、 地元の素材を巧みに利用して いる。

庭園内には黒松、モッコク、

ソテツ、ツバキなど30数種の木々が植栽されている。庭園正面の松は「来迎の松」とも呼ばれ、 陰陽五行思想が植樹の基本となっている。庭園と借景の山々の調和は観る人を魅了する。庭園 に据え付けられている水琴窟は、現存する日本最古のものと言われている。

[登録有形文化財] 安楽寺 11

往古は伯耆一宮神宮寺の天台宗の一院として、「正 来院」と号していた。2代住職恵日が承応2年(1653) に真宗(大谷派)に改宗し、「青柳山安楽寺」と改号 したとされる。境内には尾﨑家代々の墓と約3mの巨 大な経筒形の墓碑があり、この土地で尾﨑家が特別 な存在であったことを物語っている。



本堂のほか山門・鐘楼は、文化2年(1805)の真宗開山600年遠忌にあたり、尾﨑家7代当 主清右衛門が発願し再建したものである。安楽寺の建物すべてにおいて、当時の大工の細部に まで至るこだわりと技術の高さがうかがえる。中でも本堂入口の海老虹梁の彫刻は、リアルな 海老の丸みを1本の木から彫り出して表現しており見事である。鐘楼には蝉などの独特な彫刻 を見ることができる。

和田氏陣屋跡 小殿 30

代々鳥取藩の家老職を務めた和田氏は、河村郡に 所領を与えられ、松崎での自分手政治(鳥取藩から 藩内の重要拠点の町の行政を委任された制度)を許 されていた。和田氏は鳥取に住んだが、松崎から南 に少し離れた小鹿谷に陣屋を構え、留守居役や町奉 行を置いて松崎を統治した。陣屋は平屋瓦葺で正面 と西側に門があり、内に御居間と称する10間×5間 の別棟があったとされる。陣屋周辺には武家屋敷が



並び、城下町松崎は鳥取と倉吉を結ぶ街道が通り、定期市も開かれる商工業の町として発展した。

天神川直流化事業顕彰碑

鳥取県中央を南北に流れて日本海へそそぐ天神川 の下流は、かつては北条郷の天神山の大岩に遮られ て東へ大きく曲がり、羽合平野を横切って橋津川に 合流していた。天神川は度々氾濫したため、鳥取藩 は江戸前期の明暦3年(1657)から寛文元年(1661) まで約4年をかけて、大岩を開削し川を直流化させ る大土木事業を敢行した。工事は郡代の由宇勘兵衛



が担当し、河村・久米両郡の農民を人夫として雇う「百姓普請」で実施された。その結果、羽合・ 北条平野の新田開発が進み、久留村など新たな村も誕生した。

工事前の流路は舟川として整備され、長瀬宿や橋津藩倉の水運に活用された。この偉業を顕 彰するため、令和3年に天神川下流右岸の桜づつみ公園に石碑が建立された。

とまりふなばんしょ お やくしょあと

泊舟番所·御役所跡 11/48

江戸時代の泊は西向きの良港を持ち、伯耆街道の 宿場として鳥取藩公用の休憩所である御茶屋や宿駅 が置かれ、海陸交通の要所として栄えた。泊の港周 辺には寛永20年(1643)に海岸警固のための「御番 所」(組士番所)が設置され、承応2年(1653)ま



では倉吉組士(倉吉在住の藩士)が半月交代制で詰め、以後は定番制となった。宝暦8年(1758)には藩御船手役所管轄の「御役所」も設置され、船舶への徴税等の港湾行政業務を行った。

露・英などの異国船が日本沿岸に出没し始めると、藩は寛政5年(1793)に海防強化のため、百艘以上の船を小浜〜長瀬間に配備し、非常時には多数の士卒が泊に参集することを定めた。 天保年間には新たに遠見番所という異国船警固施設もつくられ、大砲も配備された。しかし元治元年(1864)に泊の沖合いを通る蒸気船を目撃したのみで異国船との接触はなく、明治2年(1869)に御番所は廃止となった。明治8年には御番所の敷地・建物が泊小学校校舎として払い下げられ「御番所学校」の愛称で親しまれた。

とっとりはんだい ば あとはし づ だい ば あと

鳥取藩台場跡橋津台場跡

[史跡] はわい長瀬 5

橋津川河口西岸にある国史跡の鳥取藩台場跡の一つ。 諸外国との緊張関係が高まっていた幕末期、幕府・諸藩 は各地に異国船を打ち払うための砲台(台場)を築いた。 鳥取藩も海岸線に8か所(浦富・浜坂・賀露・橋津・由



良・赤碕・淀江・境)の台場を築造した。橋津に設置されたのは、近くに港と藩倉があったためと考えられる。橋津台場は文久3年(1863)に造られ、現在は波で前方部が侵食されているが、もとは六角形をしていたと考えられている。高さ4m、東西138m、南北50m以上の規模であったと推測されている。橋津4号墳の盛土が運び込まれて造られた土塁からは、埴輪が見つかることがある。長瀬村の大庄屋戸崎久右衛門以下の豪農や農民らが、積極的に工事に協力した。橋津台場には18斤砲、6斤砲、3斤砲、5寸径砲の計4門が設置されていたと考えられている。

いなば に じっ しじょうせん の ち き ねん ひ

因幡二十士兼船之地記念碑

【はわい長瀬】5

幕末期の文久3年(1863)、15代鳥取藩主池田慶徳は、 後に江戸幕府最後の将軍となる一橋慶喜の弟であるため尊 王攘夷に慎重な姿勢を取ったところ、何者かが京都市中に 慶徳を佐幕派の逆賊と罵る貼り紙をした。それに憤った尊



王攘夷急進派の河田佐久馬ら22名の鳥取藩士が、藩主の側近の佐幕派重臣4名を本圀寺で惨殺した(本圀寺事件)。その後行方不明と自死した2名を除く20名は咎めを受けて日野の泉龍寺などに幽閉されたが、後に脱走して橋津の中原吉兵衛らの協力を得て、橋津港から長州を目指して船出した。橋津台場付近には彼ら二十士の記念碑が建っており、松崎の西向寺にも二十二士の顕彰碑がある。

きゅうふ じ いちはし け じゅうたく

旧富士市橋家住宅

[登録有形文化財] 小鹿谷 30

大正10年(1921)に建てられた、近代当地方の代表的な民家建築である。木造平屋建て、入母屋造りの大屋根を架け、四方に下屋根をまわす。葺き替えられる前は石州来待色の桟瓦葺きであった。外壁は土壁下地漆喰塗り仕上げである。東西に棟を通し、北側に正面出入り口を配置する。



市橋家は小鹿谷に陣屋を構えた鳥取藩家老・和田氏に従って当地へ移住した旧家で、天保8年 (1837) 頃からは造酒業で財を成した。富士市橋家はその分家で、当主の市橋陽之助は大正7年 (1918) から昭和2年まで奨恵社の理事を務めた。

ゅうとっとり か ていさいばんしょ お しかだにこうみんかん

旧鳥取家庭裁判所 (小鹿谷公民館) 小鹿



町指定有形文化財「鳥取 藩着座和田氏旧領知分小 鹿谷絵図」の写し 昭和3年に鳥取市東町 に建てられた鳥取家建替 えの際に現在地へ移築された。木造瓦葺を板で、外壁は杉板で入野は 、内部は判事が入び時れ 、東口など裁判所当時の 建具や間取りが保存されている。



昭和初期の裁判所はほとんどがコンクリート造で、木造の裁判所が現存するのは全国でここのみである。「県民の建築100選」に選定されており、今も小鹿谷地区の公民館として利用されている。

ほうこくじんちゅう ひ

报國盡定碑 [編] 9

明治維新以降の国難(戊辰戦争、西南の役、日清・日露戦争など)に殉じた戦没者や、郷土発展に尽くした功労者を顕彰し後世に伝えるため、奨恵社が明治21年(1888)から橋津1号墳のある宮山を整備して建立した。「報國盡忠碑」の周囲に、「奨恵社碑」「紀功碑」(表裏一体)、「頌徳紀功」、「千載流芳」、「流休垂裕」の4基の石碑が並び、激動の明治期における郷土の歴史の一端がうかがえる。





高辻の子持勾玉 [重要文化財] 鳥取県立博物館

明治41年(1908)、高辻字清水屋敷の急斜面の畑を開墾中に出土した。子持勾玉とは大型の勾玉の背や腹に数個の小さな勾玉を付けたもので、古墳時代の祭祀に用いられたとみられる。滑石製で高さ6.6cm、長さ10.6cm、幅9.2cm。子持勾玉が2つ連なった非常に特殊な形状で、類例は大阪府堺市カトンボ山古墳出土の1



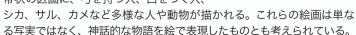
例のみである。出土地の斜面の上にある4世紀末頃の高辻10号墳から流出した可能性もあるが、子持 勾玉が作られるようになるのは5世紀中頃以降と考えられているため、単独で埋納された可能性が高い。

小浜の銅鐸東京国立博物館

昭和8年に小浜字池ノ谷の山林を開墾中に発見された。全国でもわずかしか例のない、青銅製の舌(音を鳴らすための振り子)を2本伴って出土した。高さ42.7cm、舌の長さは14cmと9cm。桜ヶ丘1号銅鐸(兵庫県出土)や新庄銅鐸(滋賀県出土)など、同じ型で鋳造された兄弟銅鐸が4つ見つかっており、弥生中期に近畿地方で造られた銅鐸が小浜へもたらされたものとみられる。



全国で60個程度しか現存しない絵画銅鐸であり、傷や穴で判別できない部分を兄弟銅鐸で補うと、精緻な流水文に挟まれた帯状の区画に、弓を持つ人、臼をつく人、



またふく しょうどうたく 北福の小銅鐸 [町指定有形文化財]

昭和5~6年頃、北福字北山ノ三の丘陵地を開墾中に、山陰で初めて発見された小銅鐸である。鋳銅製で状態は比較的良好であり、暗緑色を呈す。高さ9.25cm、うち鐸身7.6cm、鈕1.65cm、重さ213g。身の横断面はほぼ円形で、底部の直径5.2cm、上面の直径3cm、身の厚さ2~3.6mmで、鈕の厚さもほぼ同様である。文様はなく、身の上半部に長方形の穴が4個、上面に鈕を挾んで長方形と円形の穴がある。弥生~古墳時代の祭祀具とみられ、出土地一帯からは古墳時代の土師器や須恵器も見つかっている。



い し わ き ぼ う せ い さ ん か く ぶ ちじゅうた い も んきょ

石脇の仿製三角縁獣帯文鏡

[町指定有形文化財] 泊歷史民俗資料館 51

昭和32年、全長33mの前方後円墳・石脇2号墳(尾尻古墳)後円部主体部から、土師器の鼓形器台2点と共に発見された。直径14.7cm、鈕の厚さ2mm、全面に緑青を帯び、朱痕が点在する。中央の鈕の周囲に右を向いた4匹の獣を配する。櫛歯文帯の外側に二重の鋸歯文帯をめぐらしている。仿製鏡とは中国製の銅鏡を模して造られた銅鏡で、朝鮮半島や東南アジアにも見られるが日本における例が多い。



宮内の石帯 [町指定有形文化財]

早稲田神社北側の畑を開墾中、石びつの中から刀、須恵器とともに発見された。石帯は奈良~平安時代に、貴族や豪族・官人などの正装の腰帯(ベルト)に取りつけた装飾板である。身分・官位の上下によって、材質・大きさが定められていた。長辺4cm、短辺3.6cmの長方形で、厚さ5mm、全面がよく磨かれている。出土地の近くに伯耆一宮や国造屋敷伝承地などがあることから、高級貴族か官人が帯用したものと考えられている。



野方廃寺跡出土瓦中央公民館 26

仏教文化が隆盛した白鳳時代(7世紀中頃)の創建とみられる野方廃寺跡から出土した軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、 鴟尾片。軒丸瓦は複弁六葉蓮華文を持ち、伯耆国で最古の形態を持つ。寺跡は現在宅地であり遺構は確認できないが、覚善寺には野方廃寺の礎石と伝わる石炭を大き、1000円である。野方廃寺の南方450mにある丘陵「弥陀ケ平」でも礎石群が見つかっており、野方廃寺と関連する寺跡とみられる。



高辻の陶経筒(町指定有形文化財)

文政年間 (1818~1830) に高辻字墓ノ段 (通称鋳山) の山林開墾中、 青磁香炉と和鏡と共に発見された。伯耆一宮経塚の銅経筒と同様に、中 に経典を納めて土中に埋納したものである。陶製で高さ26cm、直径は 底部9.5cm、胴部14.5cm、口部11.5cmで胴部がやや膨らんでおり、 作りは甘いが堅く焼成されている。元はふたがあったとみられるが伝 わっていない。



もくじきしょうにん のこ ぶつぞう

木喰上人が遺した仏像

木喰上人(1718~1810)は現在の山梨県に生まれ、22歳で出家して真言宗の僧となり、45歳で木食戒(火の入った食物や五穀を食べず、木の実・山菜・果実のみを食べる修行)を受けた。56歳で廻国修行の大願を立て、93歳で死去するまで、北は北海道、南は鹿児島まで、千体以上の仏像を彫り、寺を建てる伝道の旅を続けた。寛政10年(1798)、81歳の時に本町に滞在し、優れた作品を4点遺している。

こうぼうだいし ぎょう [県指定保護文化財]

像高62cm、桜材と思われる一木造で、粗削りの白木造りである。 右手に五鈷杵を握り、左手に太めの数珠を持つ。少し猫背で台座に 座り、眼を閉じた思惟の相で、弘法大師通有の姿を表す。微笑を浮 かべた丸顔で、眉毛に薄く墨が入れてある。

木喰上人が7月1日から8日まで石脇村に滞在した時の作で、光背の裏に7月3日の墨書銘がある。元は集落の中心部にあった十王堂に奉納されたが、明治16年(1883)の火災で民家20数戸とともに十王堂が焼失したため、十王像と共に石脇区東方の観音堂へ移された。



ま比素像園

像高82cm、一木造で、長い立烏帽子を着けた、狩衣、指買姿。 大きな耳や丸い鼻、深く彫り込んだ衣文等に特色がみられる。微笑 んだ口元には、「微笑仏」と称される木喰上人の独創的な作風が色濃 くみられる。大黒天像と共に、石脇滞在後から7月15日まで泊の称 名寺に滞在時の作とみられる。大黒天像と共に園の恵比寿神社に奉 納された。



だいこくてんぞう 大黒天像 園

像高68cm、一木造で、頭巾をかぶり、右手に打出の小槌を持ち、 大きな袋を背負う。あご髭をたくわえ、満面の笑みの表情をみせる。米俵の上に乗せた大きな 袋に跨ぎ乗るという大胆な表現は、自由な作風で知られる木喰仏の特徴をよく表している。

だいにちにょらい ぎ ぞう [県指定保護文化財]

像高82cm、桜材の一木造で、宝冠をいただき智挙印を結ぶ金剛界の大日如来である。柔和な丸顔と丸鼻で、目を閉じた思惟の相である。彫りの深い刀法で量感に富む仕上がりとなっており、木喰仏の特徴をよく表している。光背の裏に墨書があり、「木食のけさや衣はやぶれても 己が本願はやぶれざりけり」という詠歌から、木喰上人が廻国修行に懸けた想いの強さがうかがえる。



い てん じ ちゅうじょう ひめ ぞう

大伝寺の中将姫像

[町指定有形文化財] 引地 25

木造、彩色、像高48cmで、室町時代の作とみられる。本堂の厨子に安置されているが、中将姫の命日とされる旧暦3月14・15日だけ仮堂に移され、練供養が



行われる。九品山大伝寺の開創は万寿元年(1024)で、大和の当麻寺から中将姫の遺跡を練供養で引き移したため、当地が「引地」と呼ばれるようになったとの地名伝承が残る。中将姫像に付随して、25体の阿弥陀二十五菩薩立像も伝わる。

中将姫は奈良時代の右大臣・藤原豊成の娘で、5歳で母と死別し、9歳で宮中に出仕して三位中将の位を得るが、継母の妬みを買って14歳の時父の留守中に命を狙われ山中に隠れ住んだ。翌年父と再会したが、俗世を厭い当麻寺で出家して一心に仏行に励んだ。仏の助けを借りて一夜にして蓮糸で「当麻曼荼羅」を織り上げ、29歳の時に二十五菩薩が来迎して西方極楽浄土へ旅立ったとされる。

龍徳寺の薬師如来坐像

[町指定有形文化財] 中興寺 34

龍徳寺の位牌堂に安置されている。寄木造で、像高72cm。元は 漆原の万福寺にあったが、廃寺となり大正初期に移された。承応2 年(1653)の銘がある。

龍徳寺は曹洞宗で、倉吉市和田の定光寺3世の高弟・端翁玄鋭が 永正年間(1504~1521)に開いたといわれるが、前身は伯耆一宮 の神宮寺であったとも伝わる。25世の泰雲和尚は書画にすぐれ、西 向寺などの天井絵で知られる。



円通庵の本尊で、元は字舟谷の草堂に安置されていた。鎹止めの 寄木造で、像高165cm。顔も胴体も扁平で彫が荒く、内刳りもなく、 近郷の仏師の手によるとみられる素朴な像である。背部全面に承応 3年(1654)とみられる銘がある。



西向寺の十一面観音菩薩立像 松崎 33

松崎にあった天台宗の貴法院に伝来したが、廃 寺となり昭和34年頃に松崎の西向寺に移されて、 本堂左側の外陣に安置されている。寄木造の漆箔 像で、像高113cm、衣紋の流れが優美であり、 宝冠飾りが左右に大きく広がっているのが特徴的 である。

鎌倉末〜室町時代の中央仏師の作とみられる。 同じく室町時代とみられる毘沙門天立像、不動明 王像、青面金剛像も伝わる。



西蓮寺の大六の地蔵菩薩立像

[町指定有形文化財] 橋津 7

西蓮寺本堂の前に宝暦7年(1757)に造立された、像高5.5mの石像である。当時悪病が流行し、橋津でも70余人の死者があり、その多くが子どもであった。その慰霊のため、当寺の12世面蓮社見誉上人が地蔵菩薩立像の造立を発願し、後職の観誉上人が成就させた。

明治38年(1905)の「地蔵菩薩像由来記」によると、仏体の石は宇野から、台座の石は橋津から出たもので、尊像がひとりでに台座の上にのったなど、数々の奇跡があったと伝わる。8月23日の地蔵盆では、大勢の老若男女により「茶町踊り」が奉納されている。



治地蔵堂の地蔵菩薩 11 48

ケヤキ造、像高90cmで、泊地蔵堂の本尊である。天正14年(1586)、 泊村の住人圓藤小石衛門の草創と伝わる。

信仰心が厚く正直であった小石衛門はある日、夢枕に立った弘法 大師作地蔵の使いという童子のお告げを受け、仲間の漁師と光り輝 く場所に網を入れ引き上げたところ、大洪水によって海に押し流さ れた大山寺の弘法大師作の地蔵が入っていた。小石衛門は地蔵に付 着している海草、貝類を丁寧に取払い、称名寺の境内に草庵を結ん で丁重に祀った。その後、小石衛門は再び瑞夢を見て「この地蔵を



港の傍らに遷座すれば、海陸共に守護するであろう」とのお告げを受け、村人と当時の泊番士伊木安右衛門の援助によって、波打ち際に堂を建て遷座した。以来この地蔵尊は霊験あらたかに海陸の守り仏として、今日まで篤く崇敬されている。像内には、「本願軍祐 天正十四年一月二七日敬白」の銘がある。

長栄寺の天井絵 Imfacef形文化財 長端寺の天井絵 Imm 38

長栄寺本堂の2.5m×2.8mの天井に、青龍が層雲の間をくぐって踊り、稲妻や嵐が荒れ狂う、実にすさまじい光景が描かれている。これは昭和31年に別所出身の図案家千熊章禄が心血を注いで描いたものである。

長栄寺は曹洞宗で、本尊は釈迦牟尼仏である。宝永2年(1705)に龍徳寺の12世鷲仙任峰和尚が、龍徳寺の5世「貞文存侃和尚」を勧請して開いた。もとは「安泰山」と号していたが、明治40年(1907)、15世山崎祖苗和尚が、但馬の長松寺の秦慧昭(後の永平寺貫首)に接し教化を受け、山号を「宝樹山」と改称した。山門の扁額「宝樹山」は、秦慧昭の筆である。



覚善寺の天井絵

[町指定有形文化財] 方地 44

覚善寺本堂外陣の格天井に、ウメ、ネコヤナギ、ザクロ、カキなど計36点の花木が描かれている。これらは当寺4世澄道の外孫で、のちに龍徳寺25世住職となった泰雲和尚の安政5年(1858)の作といわれている。

画材に岩絵の具を用いており、白い胡粉の上に

描かれているため、光の届きにくい天井にあっても比較的よく見ることができる。覚善寺は元は天台宗で白石城山にあったが、落城と共になくなり、寛文2年(1662)に浄土真宗の寺院として再興した。



西向寺の天井絵

[町指定有形文化財] 松崎 33

西向寺本堂の格天井に、11枚×11枚の計121 枚の天井絵が描かれている。覚善寺の天井絵と同じく、龍徳寺の25世泰雲和尚の作と伝わる。図 案は花鳥を中心に、馬や海老など多様なモチーフ を精緻に描いており、保存状態も良好である。

西向寺は慶長元年(1596)、寿心という僧の 開山と伝わる。関ヶ原の合戦後に衰退したところ を、松崎を治めた鳥取藩家老和田氏の援助を受け

て再興した。境内には鳥取の真教寺から移設した和田家累代の墓がある。



28

[町指定有形文化財] 難郷神社の狛犬 1148

文久2年(1862)、川積村(現鳥取市青谷町)の尾崎六郎兵 衛(川六)の作。台座に「石工因州川六」の銘がある。旧園神 社から移設された。地元産の比較的硬質の無斑晶安山岩を用い ているため、保存状態が良い。

尾崎六郎兵衛は、幕末期の因幡国気多郡を中心に活躍した石 工で、作品の署名を「川六」としたものが多い。青谷周辺の神 社や寺院に、狛犬、鳥居、常夜灯、地蔵尊など、多くの優れた 作品を遺している。この狛犬は川六の晩年に近い作で、大きな 目と耳、押しつぶれて平らになった大きな鼻を持ち、迫力や凄 みがあるにも関わらず、どことなく親しみが感じられる。川六 の作品としては、ほかにも嘉永3年(1850)の旧石脇神社の鳥 居が遺る。



筒地の一石彫成五輪塔

[町指定有形文化財] 筒地 53

五輪塔は平安末期~室町時代に普及した供養墓で、仏教の五 大の思想に基づき、下から地輪(方形)・水輪(球形)・火輪(屋 根型)・風輪(半球形)・空輪(宝珠型)を積み上げた形状をとる。 この五輪塔は一つの凝灰岩から彫り出されており、高さは 43.8cmで、東西南北の四面に梵字が刻まれている。

故人の笹塔婆あるいは遺髪などを納めたものと思われ、保存 状態が極めて良好である。造立年代は基礎部分の比率が低いほ ど古いとされ、この五輪塔は宝珠、軒反りの形状からみて、鎌 倉中期と推測される。地輪・火輪が大面取りにされているなど、 珍しい構造形式を持つ。



橋津藩倉の竜吐水

[町指定有形文化財] 橋津 7

橋津藩倉に常備されていた消火用具で、現代の消 火ポンプにあたる。手押し横木と筒先は消失してい るが、水槽部の側面に「橋津」「御蔵所」「文久元年 (1861)」「角輪印(鳥取藩の船印)」の文字や記号 が鮮明に残っている。橋津藩倉が当時「橋津御蔵所」 と呼ばれていたことを示す貴重な資料であり、町内 に残る唯一の江戸時代の竜吐水である。橋津藩倉古 御蔵の弐番(中央)の部屋に展示されている。



岡本家文書 [県指定保護文化財]

門田の岡本家に伝来した、天文23年(1554)以 降の200通以上の古文書群。そのうち慶長18年 (1613) 以前の中世文書28通が県の保護文化財に 指定されている。中世文書の内容はほとんどが門田 村周辺の土地の売買や譲渡に関する証文で、共通す る特徴としては、すべて永代売買であること、土地 の耕作権まで含めた売買であると推測されることが 指摘されている。また、面積に対応した価格という



天文23年 清谷分抜き所注文

観念が乏しく、土地そのものが目的ではなく、地縁・血縁関係による日常的なつながりを前提 とした、土地を担保とする米銭の相互融通が目的の売買であったのではないかという指摘もあ る。戦国の動乱期の在地社会の実態をうかがわせる史料として非常に貴重なものである。

家伝によれば岡本家の先祖は、播磨国(現兵庫県)の豪族赤松氏の庶流である有馬氏の末裔で、 羽衣石城主南条氏の家臣の堤城主山田氏の養子となったとされ、近世には河村郡や門田村の要 職を歴任した。

なんじょうもときよ き しんじょう

南条元清寄進状 [町指定有形文化財]

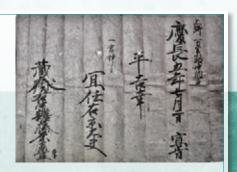
野花の松尾神社宮司家に伝来した文書で、永禄5 年(1562) に南条元清なる人物が松尾神社に神田 75石を寄進した際の寄進状である。従来は羽衣石城 主南条宗勝の次男である小鴨元清による寄進状と考 えられていたが、近年、宗勝の当時の実名が元清で あったとする説が有力となり、南条宗勝による寄進 状と考えられる。鳥取県は他県に比して戦国期の文 書の残存が少なく、年代が特定できる本文書は非常 に貴重である。



後陽成天皇口宣案

「町指定有形文化財】

伯耆一宮倭文神社の宮司家に伝来した文書で、慶 長5年(1600) に一宮神主の平(米原) 吉幸を右京 大夫に任命したもの。系図によれば吉幸は73代宮司 にあたるという。口宣案とは、中世以降に朝廷が官 職の任官などの際に発給した文書。本来口頭で伝達 される天皇の命令を蔵人が一時的に記録したメモで



あったが、後にそれ自体が公文書のように扱われるようになった。元々メモであったため、使 用済みの紙を漉き直した再牛紙が用いられるのが通例で、この文書も全体が薄墨色である。

とまり ぎょぎょうかんけい しりょう

治の漁業関係資料 [県指定有形民俗文化財]

泊歴史民俗資料館所蔵の漁撈具約500点と、県漁協泊支所などで保管されてきたシイラ漬漁 関係の絵図と古文書10点で構成される、泊地域の漁業に関連する資料群。泊という一地区で行われてきた近世から現代までの各種沿岸漁と、その変遷を体系的に示す唯一無二の資料である。

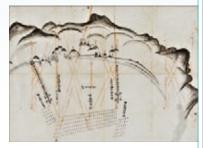
漁撈具 泊歷史民俗資料館 51

昭和40年代に、泊の医師吉田道孝氏の呼びかけにより 村内各地から収集された。主として昭和30~40年代に使 用されていたもので、漁獲のための用具を中心に、用具 の製作・修理、漁獲物の運搬・保存・加工、船上での衣食、 大漁への祈願や祝祭など、漁撈生活全般に及んでいる。



シイラ漬漁関係絵図・古文書

シイラ漬漁とは、大きな浮遊物に集まるシイラの習性を利用して、海上に孟宗竹で作った漬木(筏)を浮かべて、そこに集まるシイラを釣りや網で捕獲する漁法である。 漬木の設置場所が漁獲量を左右したため、毎年神前でのくじ引きによって割り当てが決められていた。幕末頃に作成された漁場の割り当て(山割り)を示した絵図や、くじ引きの結果を記した古文書などが遺されている。



明治初期 シイラ清漁場図

天保絵図 [町指定有形文化財]

天保10年(1839)から弘化元年(1844)まで、 鳥取藩では藩領の村々を統一基準のもとに調査し、 一村ごとの土地・耕作関係を正確に把握するための 「地改め」事業が実施された。各郡の大庄屋が主導 して調査が行われ、その成果をもとに村ごとに「田 畑地続全図」などの絵図が作成され、藩に提出された。 河村郡では、大庄屋の長瀬村戸崎久右衛門が事業を 受け持った。

羽合地域は南谷村・下浅津村・上浅津村・光吉村・ 赤池村・田後村・長瀬村・水下村・湊村・久留村、東 郷地域は宮内村・小鹿谷村・田畑村・中尾村・山辺村・



天保14年 河村郡南谷村田畑地続全図

別所村・片面村・高辻村・河上村・久見村・中興寺村・白石村・長江村、泊地域は宇谷村・園村・ 泊村・石脇村・小浜村の絵図が現存しており、幕末期の地域の実情を示す貴重な資料である。

装飾画「桐花瑞鳥図」

[町指定有形文化財]

別所出身の図案家千熊章禄が、昭和30年に 旧東郷町の町制施行記念として、旧東郷中学 校へ寄贈したもの。中央に大きく桐花を描き、 左右に雌雄の鳳凰が飛ぶ。中央下部の枠内に



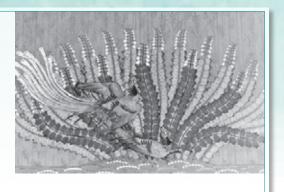
朱竹3本を添え、縁飾りには小菊の花と葉を交互に配している。

大正3年(1914) に上野で開催された東京大正博覧会に出品された。縦62cm×横270cm。

装飾画「平和の苑」

[町指定有形文化財

別所出身の図案家千熊章禄が、昭和32年に母校である旧東郷小学校へ寄贈したもの。小学校の児童達が、森厳で悠揚で静謐な雰囲気に浸り、おおらかで優美な心を養うようにとの願いが込められている。雌雄の鳳凰が理想の花苑で悠々と群れ遊び、大地に菊や桐の花が咲き誇る、平和な世界が描かれる。縦58cm×横270cm。



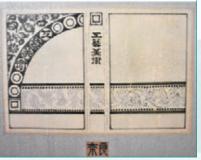
日本各時代意匠表紙図案

[町指定有形文化財]

別所出身の図案家千熊章禄が、昭和36年に旧東郷中学校へ寄贈した、学習教材用図書の表紙用の図案集。作者の意匠感によって、日本の歴史の各時代(神代・上古・飛鳥・奈良・平安・藤原・鎌倉・室町・桃山・江戸)を代表する図案が、縦24cm×横35cmの紙10枚に描かれている。

大正3年(1914) に上野で開催された東京大正博 覧会に出品されて優等賞を獲得した作品。





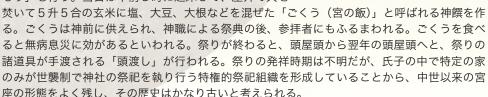
無爪尽份文代師

田後神社頭屋祭「宮の飯」

[県指定無形民俗文化財] 田後 1

その年の新穀を神に献上し、新嘗を行うとともに、来 る年の豊作を祈願する、神饌献上型の祭祀である。祭り の担い手は世襲制の5人の頭屋(当人)で、その内の1 人が頭屋頭を務める。

祭りの前日には海水で全身を清め、神社に籠る「つご もり」を行う。当日は午前3時に起床して、屋外で火を



■実施日・場所 旧暦11月1日・田後神社(田後)



湊神社の祭礼行事

[町指定無形民俗文化財] 橋津周辺 6

毎年10月の祭日に、榊、神輿、大名行列、花車が湊神 社を出発し、橋津·ト橋津·赤池地区を練り歩き、最後 は神輿を担いだまま海中へ入っていく珍しい場面もみら れる。大名行列は「ヨイトマカセ、ヒイヨイナ」という 勇ましい掛け声と共に、近世の参勤交代の行列を再現す る。赤と青の2台の花車には小学生の稚児が女装して乗



り込み、歌いながら太鼓を打つ。若衆達が担いで「赤が勝った」「青が勝った」と囃しながら、 2台は追い抜き抜かれを繰り返す。北栄町由良の花車は、橋津から伝わったといわれている。

橋津港が開かれた宝永元年(1704)、年貢米を大阪へ運ぶ藩船の海上安全祈願が執り行われ た際に、毎年祭日に舟御幸を執行するよう藩から申し渡されたことに由来すると伝わる。昭和 20年代頃までは、神輿などを乗せた船が橋津大橋から港へと川を下る舟御幸が盛大に執り行わ れていたが、担い手不足などで行われなくなり次第に祭りの規模が縮小した。昭和39年に湊神 社行列保存会(現橋津ふるさとの文化を守る会)が結成され、中断していた花車が復活するなど、 再び祭りのにぎわいを取り戻した。

■実施日・場所 スポーツの日の前日・湊神社(橋津)周辺

茶町踊り

[町指定無形民俗文化財]

毎年の地蔵盆に西蓮寺境内の地蔵菩薩像の前で踊られる盆 踊り。折編み笠に浴衣を着た踊り手が大きな輪をつくり、時 計回りに踊る。死者供養のためゆっくりと静かに踊られ、手 の振りには幽霊のように両手を前に突き出したり、両手を合 わせて拝むような仕草がある。

古くは「ニガタ踊り」と呼ばれ、江戸中期の橋津港の船の

往来が活発だった頃に、新潟方面の船乗りから伝えられた、舟に荷を積む「荷方」の間で生ま れた、瀬戸内方面から花車と共に伝わったなど諸説ある。昭和初期に三ツ星踊りの流行におさ れて途絶えそうになるも、昭和40年代に保存会が結成され、現在は橋津ふるさとの文化を守る 会を中心に伝承されている。

■実施日・場所 8月23日・西蓮寺(橋津)

宇野三ツ星盆踊り

[町指定無形民俗文化財]

安楽寺8代目住職の次男が現在の姫路市夢前町菅生澗の善 照寺に養子に入り、文化年間(1804~1818)に里帰りした 際に、菅生澗地区の踊りを伝えたのが始まりとされる。この ため近隣の三ツ星踊りとは異なる特徴を持つとされる。浄土 真宗への信仰が篤かった宇野地区で死者供養の盆踊りとして



定着し、昭和初期には踊りの輪が三重になるほど盛況だったが、戦後に一時伝承が途絶え、昭 和46年に保存会が結成されて復活した。

響掛けの浴衣姿に鉢巻を着けた男性2人が、中央に据えられた太鼓の周囲を回りながら打ち、 折編み等に波文様の浴衣姿の踊り手が、太鼓の周りを時計回りに踊る。手の振りは、祖先を拝み、 小山や海を眺め、沖から打ち寄せる波を表現しているといわれる。浴衣姿の歌い手が歌う口説 き文句(歌詞)は、現在は15番まで定められ、通常6番まで踊られている。

■実施日・場所 8月13~15日・安楽寺(宇野) 8月23日・宇野地蔵ダキ

中将姫の練供

万寿元(1024)年に大和の当麻寺から、当麻寺で行われて いた練供養の儀式で、中将姫の遺跡を大伝寺に迎えたのが始 まりとされる。中将姫の命日とされる旧暦3月14日、中将姫 像が御輿に乗せられて本堂から仮堂へ移され、翌日の午後、 仮堂から本堂に帰還する。中将姫が阿弥陀如来率いる二十五 菩薩に迎えられて、極楽往生する様子を再現している。



現在は御輿を綱で引くが、かつては当麻寺の練供養と同じように、面を着けて仏に扮した人々 が練り歩いたと伝わる。祭りの際には鐘つき堂で、半鐘と太鼓で「九品ばやし」が演奏される。

■実施日・場所 旧暦3月14~15日・大伝寺(引地)

東郷浪人踊

[県指定無形民俗文化財] 旭 27

戦国時代、羽衣石城は尼子、毛利と の争いの戦火に何度も見舞われたた め、戦死者を弔うために城下で始まっ た念仏踊りが由来とされる。

特に天正7年(1579)の毛利との 合戦は、東郷池が直っ赤に染まったと いわれるほど激しく、城は奪われ戦死 者が続出し、生き残った者は浪人と なって四散し、翌年の盆には戦死者の



霊を慰める盛大な盆踊りが催され、以来毎年7月20日の落城の日を期して東郷池のほとりで踊 りが続けられた。その後関ヶ原の合戦で羽衣石城が廃城となると、各地に散った浪人たちが夜 にまぎれて密かに集まり踊りの輪に加わって、夜が明けると再び散っていったため、いつしか この踊りは浪人踊と呼ばれるようになったと伝わる。

念仏踊り形式の哀愁を帯びた、格調高い静かな踊りが特徴。「出し初め」と呼ばれる太鼓打ち で始まり、扇子を持った歌い手が口説き文句(歌詞)を、抑揚を付けずにゆっくりと歌い上げる。 踊り手は黒紋付の装束に、折編み笠を深くかぶり、若竹色の角帯、腰に朱鞘と印籠をさげた、 浪人風のいでたちで踊る。念仏踊りを起源とするため、音を立てずにすり足や合掌をする仕草 が特徴。最後は「後締め」と呼ばれる太鼓の音で終わる。かつては様々な口説き文句が歌われ ていたが、現在は那須与一の歌となっている。

■実施日・場所 水郷祭 (7月20日に近い日曜日)・東郷湖畔公園(旭)

国主神社の麒麟獅子舞

[重要無形民俗文化財] 漆原 45

麒麟獅子舞とは、優れた君主の徳を慕って現れるとさ れる霊獣・麒麟をかたどった金色の獅子頭と、赤い胴幕 を着けて舞う2人立ちの獅子舞で、鳥取県を代表する民 俗芸能。太鼓・鉦・笛の囃子に合わせてゆっくりと地を 這うように頭を回したり、高く伸びあがるような所作で 舞う。赤い面と装束の猩々も登場する。鳥取藩主の池田 光仲が承応元年(1652) に鳥取東照宮の祭礼行列で舞 わせたのが起源とされる。因幡各地に伝播して、現在も 百以上の神社の祭礼等で舞われている。

漆原に鎮座する国主神社には、近世に作られたとみら れる麒麟獅子頭と道具一式が伯耆で唯一伝わっており、 昭和20年代頃までは例祭で麒麟獅子舞が行われていた。 因幡と比較すると、宮太鼓ではなく締太鼓を、鉦ではな



く銅拍子を用いていたという特徴があり、麒麟獅子舞の伯耆への伝播と独自の発展をうかがわ せる貴重な資料である。

泊の大名行列 11 48

[町指定無形民俗文化財]

泊港を望む高台に鎮座する灘郷神社の秋季例祭で行われる。安永 2年(1773)に鳥取藩舟番所の番士から村民に伝えられたとされ、 神社を出発した榊・幟負い・大名行列・神輿が地区内を練り歩く。

最初に榊が前祓いとして練り歩き、家々の門前で榊を地面に打ち 付けて揺らしながら地しめ歌を唄う。幟負いは手作りの鎧に烏帽子 を着け、顔に墨でひげを描いた子ども達が、背中に幟を立て、大青



竹に金銀色紙を貼り中に一文銭を付けて音の鳴るようにした大杖を前後に倒しながら、ゆっく りと進む。大名行列は顔に化粧をした若衆が前箱・大鳥毛・後箱など様々な道具を持ち「ヒニヨー ヤナ、ヒニヨイト、マカセ」と威勢良く声を上げて練り歩き、近世の参勤交代の様子を再現する。 ■実施日・場所 スポーツの日の前日・灘郷神社(泊)周辺

泊貝がら節

[町指定無形民俗文化財] 泊周辺

江戸後期から昭和まで、県内沿 岸部では数十年おきにイタヤ貝の



大群が発生し、特に天保5年(1834)の大漁のにぎわいは鳥取藩日誌にも記述されるほどであっ た。この頃から漁師達の間で労働歌として唄い出され、泊や橋津、青谷、浜村などにそれぞれ 独自の貝がら節が伝わっていた。昭和8年に浜村温泉の新民謡の貝がら節が全国的に有名にな ると、各地の貝がら節がその影響を受けたが、泊貝がら節は古い録音から復元されたため独自 の形を残しており貴重。元は唄のみであったが、泊で昔から踊られていた「おぼこ踊り」と合 わせて保存会によって伝承され、今も泊小学校で指導が続けられている。

重労働である貝獲りの過酷さと大漁の喜びを伝える、豪快だが哀調を帯びた唄と調子が特徴。 歌い手は1人で、唄の合間に囃し手による「ヤッシンコイ」などの囃し言葉が入る。1人が中 心に据えた巨大な太鼓を力強く打ち、法被姿の踊り手は下手から踊りながら登場して太鼓の周 りを囲み時計回りに踊る。

■実施日・場所 5月・泊小学校運動会 6月・グラウンド・ゴルフ発祥地大会

園の「ええ子ええ子」

毎年1月に行われる園地区の年中行事。日が沈む頃、公民館に集 まった子ども達が地区内を練り歩く。この1年で新しくお嫁さんを 迎えた家や、出産を控えた家々を訪問し、「てんじりこ」でお嫁さ んのお尻を叩きながら「ええ子ええ子よー」と大声で歌ってお祝い をして、ご祝儀をもらう。これはお尻の座った元気な子どもが生ま れるように、という願いが込められている。「てんじりこ」は藁を



編んで作られており、ひもの先に球体が付いた形状をしている。町内で園地区だけに残る行事 だが、西日本各地に分布する「亥の子」行事の流れを汲んで独自に発展したものと考えられる。

■実施日・場所 1月中旬の十曜日・園地区

は ごろもてんにょてんせつ

羽衣天女伝説

日本を始め世界各地に見られる異類婚姻譚の一つで、静岡県三保の松原や京都府天橋立のも のが有名だが、本町では地名起源説話として次のような話が伝わっている。

羽衣石山で天女が水浴びをしていたところ、山のふもとに住んでいた農夫が岩の上に脱ぎ置 かれた天女の羽衣を取って帰ってしまった。天女は天に帰ることができず、山のふもとに下り てきて農夫の妻となった。そして2人の子どもをもうけるまでになったが、農夫は羽衣のこと

を一切妻に話さなかった。ある日、天女は2人の子 どもに羽衣のありかを聞き出し、羽衣を見つけて着 ると子どもたちのことを忘れてしまい、そのまま天 へと飛んで帰ってしまった。残された子どもたちは 母を慕って泣き悲しんだという。

山頂近くに羽衣を干した大きな岩があるため、そ の山を「羽衣石山」と呼ぶようになったという。また、 母を慕って悲しんでいた2人の子どもが、倉吉市に ある小高い山に登り、母が好きだった鼓を打ち、笛 を吹いたので、その山を「打吹山」と呼ぶようになっ たという。『陰徳太平記』などでは、農夫ではなく羽 衣石城の初代城主の南条貞宗となっている。

は ごろもい わ [町指定名勝] 羽衣后 羽衣石 41

天女が天界から舞い降りた際、羽衣を置いた大岩

で、天女の「影向石(羽衣石)」とも呼ばれ小さな祠 が祀られている。

この岩の傍らの石の上には、天女のものとされる 足跡が一つ残っている。

は ごろもい け [町指定名勝]

羽衣石 41

別名「お茶の水の井戸」とも呼ばれている、 小さな湧水の池である。

戦国期に羽衣石城の城兵の、貴重な飲料水 として使われていたと思われる。『羽衣石南 条記』には「清水、北洞より湧き出、大干魃 といえども乾くことなし」と記されており、

「この井戸を汲み干すと大雨が降る」との言 い伝えも残る。また、天女がこの池で水浴び をしたという伝説もある。





[町指定名勝] 今滝 電 47

この滝は、舎人川上流の標高 124mの所にある高さ約44mの一段 滝である。鉢伏山に源を発しており、 三方の安山岩の絶壁から、一筋に流 れ落ちる姿が美しい。 滝開きは7月 15日である。

滝つぼが広く真夏でも涼しいた め、毎年多くの人々でにぎわう。

ふどうだき 不動滝 源 46

この滝は、漆原川上流の標高96mの所にある。 鉢伏山に発する豊富な水量を受け、二方にそびえ る安山岩の岩壁の上、約32mから落下する二段 滝である。古来より不動明王を祀り、行場として 信仰を集めている。毎年7月7日には、神事の後 に厄年の人が滝に打たれて厄払いをする滝開きが 行われる。

あゆがえ 鮎返りの滝 豚石 39

十万寺川にある高さ約10mの小さな滝。両側 の切り立った岩肌の正面に三段滝がみられ、周囲 の景色と相まって壮観である。鮎がこれ以上登れ ないことから、鮎返りの滝と呼ばれている。







字野地蔵ダキ

「町指定名勝] 字野 12

地蔵3体を祀る法華堂の脇から流れ出 る湧水は、水量が豊富で枯れたことがな く、昔から宇野地区の生活用水として重 宝されてきた。古くから名水として知ら れ「平成の全国名水百選」に選定され、 いつも名水愛好家の採水でにぎわっている。

傍に立つ6m近い巨岩には「南無妙法 蓮華経」の題目が刻まれており、元禄2 年(1689) に長瀬村の弥兵衛という人物 が建立したもの。



か め い し [町指定名勝] **亀石 印 13**

宇野の海岸から約50m沖合に、首を上に突き出した亀 の形の岩がある。地元の伝承によれば、神代の昔、出雲 の大国主命の娘である下照姫命が亀に乗って、宇野と宇 谷の境にある仮屋ヶ崎という海岸にたどり着いた。亀を 海岸に待たせて上陸した姫はこの地を気に入って、出雲 へ帰るのを忘れて住み着いた。亀は命じられた通りに 待っていたが、待ちくたびれてとうとう岩になってし



まったという。倭文神社には、亀石のある宇野から下照姫命が通ったとされる道が、現在も裏 参道として残されている。

宮内 15

倭文神社の西方の東郷池に面した高台は、出雲 山と呼ばれている。地元の伝承によれば、神代の昔、 倭文神社の祭神の下照姫命は、出雲からやって来 て倭文神社の社地を気に入り住居を定めた。その 後、住民に安産や織物の指導をしてこの地域の発 展に尽くしたが、故郷である出雲が恋しくなると、 この高台に来て遠い出雲の方角を眺めていた。そ



の姿を見た人々はいたわしく思い、いつしかこの高台を出雲山と呼ぶようになったという。 現在は展望台として整備され、東郷池と羽合平野、その先に日本海と茶臼山、遥か彼方に中

国地方最高峰の大山の雄姿と島根半島が霞む絶景を楽しむことができる。

ど べんてん [町指定史跡] 宫户弁天 翻 14

倭文神社の北西の東郷池のほとり、かつては小 島であったが現在は埋め立てられて陸続きになっ ている場所に、宮戸弁天と呼ばれる祠と大岩と鳥 居があり、七福神の紅一点である弁財天が祀られ ている。かつては伯耆一宮の七弁天と称して、地 内の水辺7か所に弁財天が祀られていたとされる が、現在祠が残っているのはここだけである。

地元の伝承によれば、倭文神社の祭神である下 照姫命がこの島で釣りを楽しんだとされ、姫の使

いの白蛇がこの島から池を渡り、南西の対岸の小島まで往復していたという。

対岸の小島はこの伝承に基づき「龍(蛇)の渡る島」で「龍渡島」と呼ばれるようになり、 後に湖中から温泉が湧いて明治以降に温泉地となったため「龍湯島」とも呼ばれた。現在は 「龍島」と表記され、小島は埋め立てられて陸続きになっている。



馬ノ山展望台

[町指定名勝] 上橋津 10

橋津(馬ノ山) 古墳群の10号墳に隣接 する展望台。東郷池周辺や日本海、大山、 蒜山三山、羽衣石山などが眺められ、出 雲山展望台と同じく東郷池周辺の眺望を 堪能できる。付近にはハワイ風土記館が あり、橋津地域の歴史や民俗、伝統行事 などに関する展示があるほか、5階の展 望室からは360度の絶景を楽しむことが できる。(入館無料、月曜・祝日休館)

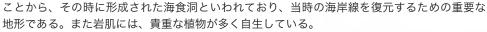


橋津の離水海食洞

[町指定名勝] 上橋津 8

馬ノ山丘陵の北西端、国道9号線南側の町 道に沿って険しく切り立った崖がある。岩石 は鉢伏山板状安山岩で、波によって浸食され てできた海食洞(海食崖)である。現在、波 の全く届かない陸地にあるため、離水海食洞 と呼ばれている。洞窟の深さは、最も深い所 で10m以上ある。

よりも2~3mほどト昇していた(縄文海進)



離水海食洞は、橋津のほか園、原、宇谷、宇野などにも残っている。

約6千年前の縄文前期には、海水面が現在

うしろ じ ま 後島の甌穴群 11149

泊港の北東にある後島に見られる、岩石ト にできた円形の穴。通称「トビの鼻」「鬼の釜」 と呼ばれる所に点在している。「トビの鼻」 は東西25m、南北40mの、海に突出した波 食棚で、多孔質玄武岩層である。

甌穴は「一種の海食凹地であり、水の流れ によって回転する礫の削摩作用によって形成 され、多少とも円味を帯びた凹み」と定義さ れ、砂岩、泥岩のような粒状の岩石にできや

すいとされている。「トビの鼻」には、深くて大きな甌穴が多く見られる。

はわい温泉 はわい温泉 19

東郷池西岸にある温泉地。その歴史は天保14年(1843)に地元の漁民・六右衛門が湖中から湯が湧き出ているのを発見し、鳥取藩に泉源の利用を願い出たのに始まる。慶応2年(1866)に湯村幸助が、湖底の源泉を湖上に浮かべた舟に竹筒で引き込み「幸助湯」と称する温泉を始めたが、数年後大風で流されてしまったという。明治20年代になると上



浅津の水田で源泉を掘り当て、はわい温泉の前身となる浅津温泉の開発が始まった。鉄道がなく交通の便が悪かったが、大正期に松崎駅から定期船が整備されるとにぎわいを見せ始めた。

戦前には旅館が6軒しかなかったが、高度経済成長期の昭和30年代から急速に増え、昭和50年代には23軒の旅館が軒を連ね、名称も「羽合温泉」に改められた。特に自動車の普及に伴い観光客が激増し、県下でも有数の温泉地に発展した。平成10年に現在の「はわい温泉」に改名。温泉団地の開発も進み、近隣の一般家庭にも温泉が配湯されている。

無色透明無臭の硫酸塩泉で、源泉温度は約50度。東郷池を岬状に埋め立てた立地のため、温泉街全体が湖上に浮かんでいるかのような景観が楽しめる。現在は10軒の旅館と、日帰り温泉施設「ハワイゆ~たうん」がある。東郷温泉と合わせて池のほとりに7つの足湯が設置されており、七福神の湯として親しまれている。

とうごうおんせん

東郷温泉 松崎岡 27

東郷池南東岸のJR松崎駅周辺にある温泉地。明治元年(1868)頃に温泉の利用が始まり、東郷池の小島・龍湯島に入浴施設が作られた記録がある。明治5年に下田中村(現倉吉市)の豪農・山枡直好が東郷川河口左岸に泉源を開発し、養生館と称する別荘を建てて村民の保養所として開放した。明治17年には今も続く老舗旅館「養生館」を創業し、大隈重信、小泉八雲、志賀直哉など多くの著名



人が訪れた。明治末期の山陰本線の開通や、田山花袋の『日本一周』(大正4年刊行)で紹介されるなど大正期の旅行ブームにより、県下第2位の集客を誇る温泉地として発展した。

花街としても知られ、明治後期には龍湯島に住む元鳥取藩士族の娘・葉玉という芸者が、三味線や長唄の名手で評判を博していた。昭和初期には10軒近い置屋に30人近い芸者がおり、松崎の芝居小屋「共栄座」で舞踊や三味線を披露していたという。

東郷川河口右岸の温泉街は松崎温泉と呼ばれていたが、昭和28年の町村合併による東郷町の誕生により東郷温泉の名称に統一された。昭和32年には、全国に先立ち国民宿舎第1号「水明荘」が開業した。現在は養生館と水明荘の2軒の旅館、中国庭園「燕趙園」に併設した日帰り温泉施設「ゆアシス東郷龍鳳閣」、足湯や温泉スタンドがある。

天然就念伽

トウテイラン自生群落

[県指定天然記念物] 上橋津・宇谷・小浜

オオバコ科クワガタソウ属の多年草で、町の花に選定されている。茎の先端に穂状の花序が付き、瑠璃色の花が下から上へと徐々に開いて、7月下旬から10月頃まで長く観賞することができる。白い綿毛におおわれたシルバーリーフが特徴的で、園芸用にも親しまれている。中国湖南省にある洞庭湖の水のように花の色が青く澄んでいることから、「洞庭監査」と名付けられた。

野生のトウテイランは極めて希少で、絶滅 危惧種に分類されている。本町のほかには、 島根県の隠岐諸島、京都府の京丹後市など山 陰の海岸部のみに自生している。町内の3か 所の自生群落は、県の天然記念物に指定され ており、無断で採取することは禁止されている。

橋津の「トウテイランの里」には約2千株のトウテイランが植えられており、夏季には 青紫の花々とハワイ海水浴の青い海を眺める ことができる。





トウテイランの里

オオサンショウウオ

[特別天然記念物]

日本各地の清流に生息する世界最大の両生類。夜行性で、水の中で魚やカニなどを食べる。体長は50~70cmほどだが、最大1.5mの個体も存在する。野生下でも10年以上生きる。本町では、羽衣石川上流で生息が確認されている。写真は台風により流されて天神川下流で保護された個体。



山陰柴犬 [天然記念物]

かつて全国各地に「地犬」と呼ばれる固有の日 本犬が存在していたが、山陰地方の「地犬」の流 れを汲むのが山陰柴犬である。アナグマ猟に適し た小さめの頭と立ち耳、引き締まった筋肉質な体、 飼い主に対し非常に忠実で無駄吠えが少なく、勇 敢で警戒心が強いという特性を持つ。遺伝的には、 韓国の珍島や済州島の犬に近いとされている。



明治以降の洋犬人気による洋犬との交雑や、鉄道の普及による日本各地の日本犬の交雑が進 み、純粋な地犬が激減していく中、宇野の尾﨑益三は強い危機感を持って鳥取の地犬の調査・ 保存に着手した。山陰地方を歩いて良質な地犬を譲り受け、自邸(現在の重要文化財「尾﨑家 住宅」)に大舎を設けて多数の犬を飼育し、繁殖と固定に取り組んだ。戦争の拡大により犬の飼 育が厳しくなる中、時の県知事林敬三などの支援を受けなんとか生き延びた鳥取の地犬は、戦 後に島根県西部の石州犬と交配して、現在の山陰柴犬へとつながった。

昭和20~30年代には犬の伝染病が流行して個体数が激減し、その後も低迷が続いていたが、 尾﨑家を中心とする愛好家達の地道な保護活動により徐々に増加していき、現在は約500頭の 山陰柴犬が飼育されている。平成16年に「山陰柴犬育成会」が結成され、保護活動と愛好家同 士の交流が行われている。

に じっせい き なし き ひゃくねんじゅ

二十世紀梨の樹「百年樹」

[町指定天然記念物] 久見 36

旧東郷中学校の東側の梨園に、湯梨浜町に二十世紀梨 が導入された初期の樹がある。二十世紀梨は鳥取県の産 物の筆頭にあげられているが、その中でも湯梨浜町の梨 は昔から質・量共に最高で、日本一であると言っても過 言ではない。千葉県で発見、育成された二十世紀梨は、 明治37年(1904)春、鳥取市桂見の北脇永治氏が、初



めて県内に苗木を導入。当時は長十郎などの赤梨が栽培されていたが、二十世紀梨の品質の良 さを買って接木によって品種改良を加えたものである。

この百年樹は、明治39年に久見の更田安左衛門が高田豊四郎(三朝町出身の技師)から枝を 譲り受け、早生赤梨に接ぎ木をしたもので、二十世紀梨栽培の歴史を物語る古木である。幹回 り約2m、枝は東西約14m、南北約16mに広がる全国屈指の梨の巨木である。

松崎神社の社叢 極 32

松崎神社の社叢はシイの木を主体として、タブの木な どの常緑広葉樹が加わったものである。境内のスダジイ は神木で、目通り周囲6m、樹高15mに達し、樹齢は約 350年と推定されている。



国主神社の社叢 源 45

[町指定天然記念物]

北福に鎮座する国主神杜の杜叢は、標高10mの平地の境 内にあり、タブノキ・ケヤキ・ムクノキ・ヤブツバキ・スギ・ ムクロジなどの巨木、老木を主体にする疎林である。社殿裏 のタブノキは樹齢が最も古く、およそ500年と推定される。 目通り周囲5.6m、樹高25mで、神木としてあがめられてい る。社殿前のムクノキは、目通り周囲4.7m、樹高25m、ケ



ヤキは目通り周囲3.8m、樹高25mで、共に樹齢250年とみられ、近在では珍しい巨木である。

つばき [町指定天然記念物] 宮内井戸の椿 動 17

早稲田神社の前にある椿の古木。幹の目通り直径50cm、樹冠は 南北10m、東西8.8m、樹齢約200年といわれ、春先には真っ赤な 花を多数つけるヤブツバキである。樹の下には井戸があり、清水が こんこんと湧き出ている。飲料水に乏しかった宮内地区の人々の、 数少ない水源の一つであった。水源涵養のための樹として、大切に 保護されてきた。



まけたすたすたすたすたでで

更田家の前庭に生育している。ツブラシイと呼ばれる大木で、目 通り周囲5.5m、樹高20m、枝張り直径は12.2mあり、樹齢約500 年と推定されている。



更田家マキの木 2月37

更田家の古い墓地に、イヌマキと呼ばれているマキの木が生育し ている。イヌマキは暖地性の樹木であるが、更田家のものはまれに 見る古木大樹で、支幹は5本から成っており、植物学上貴重である。 樹齢約300年といわれており、目通り周囲3.3m、樹高約30m、枝 張り直径15mで樹勢は旺盛である。



町かかりの人伽

伊王野坦 (1813-1883)

文化10年(1813)、石脇村で鳥取藩士の子として生まれる。緒方洪庵等に師事して蘭学医と なり、安政4年(1857)に日本初の内科診断学の翻訳本「察病亀鑑」を刊行。明治元年(1868) に久美浜県知事となり、その後鳥取県の官職を歴任した。没後に従五位を贈られており、蘭学 史に名を残す人物。

尾﨑文五郎 (1825-1898)

文政8年(1825)、宇野村の豪農・尾﨑家に生まれる。明治14年(1881)に設立された「奨 恵社」の立役者の一人。「奨恵社」は当時の県中部で唯一の慈恵厚生組織で、闲窮した農民の援 助を目的とした。また、地元の宇野村の災害に備え、甘藷倉を建てて村民に提供するなどの慈 善活動を行った。

栗原潔子 (1898-1965)

中原和郎の妹で歌人。明治31年(1898)に橋津村で牛まれ、大正2年(1913)に16才で佐々 木信綱の門下に入り、早くから頭角をあらわし、当時としては例外的に早い22才で第一歌集「潔 子集」を刊行。理知的な作風が特徴。昭和20年代後半から短歌総合誌「心の花」の編集委員を 務める。

三枝礼二 (1843-1907)

天保14年(1843)、清谷村(現倉吉市清谷)に生まれ、元の名前は福井音蔵といった。泊の 間物問屋である鍵屋の主人となり、元治元年(1864)に、天誅組の変に参加して幕府から追わ れ泊に逃れてきた尊王攘夷派の僧侶三枝真洞を匿う。真洞を師と仰いで多くのことを学んだ音 蔵は、後に名前を「三枝礼二」に改めた。明治5年(1872)に明治政府により学制が布かれる と、すぐに小学校建設願いを提出して自邸を校舎として寄付し、県下でいち早く泊小学校の開 校が実現した。その後、県会議員として泊港の改修に尽力し、泊組合村の村長も務めた。

谷田亀寿 (1889-1972)

明治22年(1889)、日下村清谷(現倉吉市清谷)に生まれる。教師として教鞭を執るかたわら、 郷土史研究に生涯を捧げ、地方文化の向上に大きな足跡を残した。大正11年(1922)、宇野尋 常小学校への転勤を機に、宇野村の尾崎氏庭園の調査や、「橋津港藩御蔵之絵図」の収集などを 行った。昭和28年に羽合町が誕生すると、町史編さん委員長として尽力した。

だん の ぞうろく

团野蔵六 (1867-1936)

慶応3年(1867)に橋津村に生まれる。山陰の漢詩界の重鎮として漢詩の指導にあたるかた わら、郷土の子弟の教育に生涯を捧げ、地方文化の向上に大きな足跡を残した。明治17年(1884) 橋津小学校、明治45年宇野小学校長に転じ、漢詩の創作への情熱を失わず、東郷池のほとりで 山陰大詩会をしばしば開催した。

千熊章禄 (1883-1965)

明治16年(1883)に別所村に生まれ、明治44年東京美術学校(現東京芸術大学)卒業後、 京都市立美術工芸学校教諭として、図案学や美術史などを担任。昭和元年には、私塾「昭和図 案工芸研究所」を開設。立体図案の大家として指導に専念した。主な作品は、長栄寺の天井絵「大 雲龍」、旧東郷中学校へ寄贈された「日本各時代意匠表紙図案」など。

長瀬材利七 (1824-1869)

長瀬村出身の利七は16才で船乗りとなり、摂津(現神戸市)の栄力丸という船の乗組員となっ て、嘉永3年(1850)に江戸から摂津へ帰航する途中、太平洋で遭難しアメリカの商船に救助 される。その後、ゴールドラッシュに湧くサンフランシスコに渡り、地元の新聞に取材されたり、 仮面舞踏会に参加したりと異国文化を肌で体験する。またその頃に撮影された写真が現存して おり、初めて写真に写った日本人の一人となった。苦難の末4年後に帰国を果たし、郷里で藩校 尚徳館の役人に取り立てられ、自身の体験談を藩士や儒学者に語り、鳥取藩の人々の海外情勢 への理解に貢献した。この時の遭難者の中には、後にアメリカ領事館の通訳となって活躍した ジョセフ・ヒコ(本名彦太郎)もいた。

\$ n t 5 n 5 5

中原和郎 (1896-1976)

明治29年(1896)に橋津村に生まれる。大正7年(1918)にアメリカのコーネル大学生物学科を卒業し、同年に学友であったドロシーと結婚した。ニューヨーク・ロックフェラー研究所助手としてがん研究に従事し、昭和37年に国立がんセンター研究所初代所長、昭和49年に同総長を務め、日本におけるがん研究、対策の分野に大きな貢献をした。チョウの収集家としても知られ、東郷池周辺にも生息する絶滅危惧種のシジミチョウ・シルビアシジミは、和郎が夭折した娘シルビアの名を和名に付けたもの。

はし だ くにひこ

橋田邦彦 (1882-1945)

明治15年(1882) に鳥取で生まれ、長瀬村の医師橋田浦蔵の養子となる。東京帝国大学医科大学教授を務め、「科学する心」を推奨し、生理学者・医学者として多くの業績を上げた。昭和15年に文部大臣となり、戦時下の困難な教育行政を担ったが、軍部が推進しようとしていた学徒動員などに反発して昭和18年に辞職。昭和20年の終戦直後、戦犯として警察署への出頭を求められ、服毒自殺した。

ふじわら き よ ぞう

藤原喜代蔵 (1883-1959)

明治16年(1883)、北福村の農家に生まれる。戦前の日本を代表する教育評論家。教育思想を政治、宗教、文芸など社会全般の時代思想の中で論じ、同時に教育界の主要な人物の行動や境遇をも評論している。文部省の教育施策に多大な影響を与えた。著書に「明治大正昭和教育思想学説人物史」など。

ます だ てんきち

益田伝吉 (1856-1948)

安政3年(1856)に田畑村で生まれ、質屋の経営などで財を築いた。明治26年(1893)に 東郷村・松崎村組合村長に就任し、この年に大水害に見舞われた村内の耕地を復旧させた。大 正9年(1920)に倉吉市の天神野耕地整理組合の組合長に就任し、難航していた天神野開墾の 国家事業に1万円を超える私財を投入し、工事費の節約や資金確保、組合員の意欲向上に努め て見事成功させた。

みどりか わ

碧川かた (1872-1962)

明治5年(1872)に鳥取藩の家老和田氏の娘として松崎で生まれる。三木節次郎と結婚し、 童謡「赤とんぼ」の作詞で知られる詩人・三木露風など2児を授かるが、離婚して鳥取へ戻る。 その後自立を志して東京帝国大学看護婦養成所を卒業し、大学付属病院に看護婦として勤務し、 日本の訪問看護の先駆けとなる。米子出身のジャーナリストの先駆者・碧川企救男と再婚し、 映画カメラマン碧川道夫など5児を授かる。熱心なキリスト教徒であり、夫・企救男や再会し た息子・露風とも協力しながら、婦人参政権運動など女性の自立のための活動に尽力した。

もりおかりゅうぞう

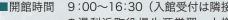
森岡柳蔵 (1878-1961)

明治11年(1878) に松崎に生まれ、明治31年に上京し黒田清輝の内弟子となる。明治36年に東京美術学校(現東京芸術大学) に特別進級して卒業。大正11年(1922) から3年間のフランス留学中は、前田寛治や藤田嗣治とも交友し、レオナルド・ダ・ビンチの「婦人像」を模写、後に東京国立美術館に寄贈。国民宿舎水明荘開業記念のパンフレットや絵葉書の図案を手掛けるなど郷土とのつながりも深く、その後の県内の画家たちに多大な影響を与えた。

歷又民份資料館

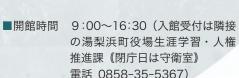
羽合歴史民俗資料館

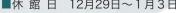
重要文化財「長瀬高浜遺跡出土埴輪」や県 指定保護文化財「長瀬高浜遺跡玉作関係資料」 など、長瀬高浜遺跡と橋津(馬ノ山) 4号墳 から出土した考古学遺物を展示。施設の外観 は、長瀬高浜遺跡出土の家形埴輪を模している。



■休館日 12月29日~1月3日

■入館料 大人100円 小・中学生50円(20名以上の団体は大人80円 小・中学生30円)





泊歴史民俗資料館

県指定有形民俗文化財「泊の漁業関係資料」 を中心に、主に昭和30~40年代に使用されて いた漁撈具、農具、生活道具などの民具約2千 点や、町指定有形文化財「彷製三角縁獣帯文鏡」 などを展示。漁業に使われた伝馬船の実物や、 泊で改良・使用された漁撈具の数々から、漁村 特有の民俗を知ることができる。

■開館時間 9:00~16:30 (入館受付は隣接 の中央公民館泊分館

電話 0858-34-3011)

■休館日 12月29日~1月3日

■入館料 大人100円 小・中学生50円(20名以上の団体は大人80円 小・中学生30円)



写真提供(敬称略)

東京国立博物館 東京大学史料編纂所 鳥取県立博物館 鳥取県埋蔵文化財センター 長瀬歴史研究会

表 紙 写 真:橋津(馬ノ山) 4号墳/湊神社の祭礼行事/木喰上人の恵比寿像・大黒天像/羽衣 石城跡/高辻の子持ち勾玉/岡本家文書「天正15年 貝屋九郎左衛門等畠作職売 券」/三角縁神獣鏡(橋津4号墳出土)/尾崎氏庭園/泊の漁業関係資料「ガス式 集魚灯1/泊貝がら節/山陰柴犬/はわい温泉/伯耆一宮倭文神社例祭/西向寺の 毘沙門天立像/蓋形埴輪(長瀬高浜遺跡出土)/大伝寺の中将姫像/グラウンド・ ゴルフ発祥の地(潮風の丘とまり)/トウテイラン自生群落/長栄寺の天井絵/東 郷浪人踊

裏表紙写真:甲冑形埴輪(長瀬高浜遺跡出土)

湯梨浜町 歴史文化財ガイドブック

発 行 平成26年3月 初版

平成31年3月 第2版

令和6年3月 第3版

発行者 湯梨浜町教育委員会

〒682-0723 鳥取県東伯郡湯梨浜町久留19番地1

TEL 0858-35-5367 FAX 0858-35-5387

印 刷 勝美印刷株式会社

